

く ぐ つ し し お ん イ ン ザ エ デ ン  
傀儡士紫苑 in the Eden

秋月あきら

## 復讐の朱

蒼い月が世界を照らすその影で、黒土に滲み出す赤い血。

水が湧くように地の底から朱が滲み出す。

地の底でなにかが蠢いている。

指が出た。

土を握り締める拳は赤く染まっている。

指先は血を滲み出しているだけではなく、指そのものが赤い。指には皮がなく、筋組織が剥き出しになっている。

死者がまるで墓から這い出すように、それは暗い地の底から現世に蘇ったのだ。

真っ赤なその肉体は、やはり皮がなく、人体模型のように内臓が覗いている部分もある。

血の滴る肉体に薄い皮が張られていく。

優美な肉体が徐々にその形を完全なものへ……この者は女だった。豊満な胸と脂の乗った尻にこびり付く血が、妖々しくも美しさを醸し出している。

魔性の者がそこにいた。

朱に染まった血の衣装を纏った妖女。

ただしかし、その妖女には片腕がなかった。筋組織から再生したにも関わらず、片腕を失っているのだ。

妖女は乱杭歯を覗かせ、疼く腕の傷痕を押さえた。

「この恨み晴らさんぞ……」

艶笑を浮かべたその顔は、翳り邪悪を映し出していた。

突然の敵は背後から現れた。

人気の少ない裏通りの影から現れた異形。

しかし、紫苑しおんは背中に眼があるように、刹那にして妖系の煌きを放つ。

醜い顔がさらに醜く歪み、異形の頭部が宙を舞った。

鈍い音を立てて墮ちた頭部に眼をやる紫苑。

白い仮面が見定めた異形は人型の生物であった。毛は一本もなく、餓鬼のような容姿をしている。特徴的なのは、肉食獣のような鋭い犬歯だろうか。

まだまだ大きな事件にはなっていないが、水面下で帝都を脅かしている事件の陰。

新型の人体変異ウイルスが帝都で広まりつつあるのだ。

紫苑の依頼主はそのウイルスに興味を持ち、ウイルスの確保を依頼した。

首を飛ばされた異形の体は滅びつつあった。燃えカスのように塵と化し崩れて逝く。だが、驚くべきことに胴を失った首は生きているのだ。

顔面に蒼白い幽鬼の相を映し、怨念の籠もった眼で白い仮面の主を睨みつけている。

変わった。

瞬時に紫苑はそれを感じた。異形の瞳の色が変わったのだ。

視覚的ではなく、中身の人格が変わったとでもいうのだろうか。  
下卑た異形の顔に相應しくない玲瓏たる魅言葉が発せられる。  
「……蘭魔……秋葉蘭魔……」  
その名を聞いて紫苑の先にいる愁斗は驚かずにいられなかつた。

微かに紫苑を操る愁斗の意識が乱れたが、それを敵が察したかはわからない。

紫苑の白い仮面は、どこまでも無表情に異形を見下している。  
「なぜその名を知っている？」

「蘭魔……憎い……憎い……汝は彼奴のなにぞ？」

紫苑は答えなかつた。

秋葉蘭魔 それは愁斗の父。今は行方知れずになっており、生存すら不明だ。その父の名をなぜ異形が知っている？

異形の中で眠っていた楔の鍵が解かれようとしていた。

なんと単細胞生物に匹敵する再生力で生首の下が生えはじめたのだ。

植物が枝を伸ばすように骨が形成され、内臓が果実のように実り、筋組織が蔓のように躰に巻きつく。

紫苑が依頼を受けるときに聞いた報告では、これほどまでの再生力はなかつたはずだ。

加えて、異形は先ほどまで雄だった。今は外見的には雌だ。  
優美な曲線を描く裸体を露わにし、醜悪な異形の顔はたちまち妖艶な美女に生まれ変わったのだ。

「蘭魔と同じ魔性を纏う者……何者ぞ？」

玲瓏たる声で妖女は問うた。

「なぜ蘭魔の名を知っている？」

「妾の自尊心を傷つけた者……この腕を見るがよい！」

妖女には右腕がなかった。まるで鋭利な刃物で切断されたように、断面も鮮やかに肩から先がないのだ。

殺気の満ちる妖女から紫苑はすでに問合いを取っていた。

大よその察しはつく。妖女は己の腕を奪った者を怨んでいる

それが蘭魔なのだ。

艶めかしい裸体をくねらせながら妖女は艶笑を浮かべていた。

「汝の業、しかと見たぞ。あの業、憎き蘭魔と同じモノ。汝は

蘭魔のなにぞ？ 蘭魔はどこにいるのかえ！」

妖女は柳眉を逆立て怒号を飛ばした。

しかし、無機質な白い仮面は無表情のままだ。

「蘭魔の所在は私が聞きたいくらいだ」

「戯け事を、彼奴の居場所を言え！」

紫苑の言葉を信じない妖女は乱杭歯を覗かせ、般若の形相で

襲い掛かってきた。

すでに構えていた紫苑の攻撃は早い。

放たれた妖系は妖女の膝を切り飛ばした。それでも妖女は勢いよく手を伸ばして紫苑に飛び掛かってきた。

再び紫苑の手から妖系が放たれる。

乱れのなく振り下るされた妖系は妖女の眉間に入り、臑を真っ二つにしてしまった。

割れた胴体が紫苑の真横を掠り抜けた。そして、重い音を立

てて地面に墮ちる。

それでも妖女は生きていた。

真つ二つに割れた躰の断面がぶよぶよと蠢きながら、すでに再生をはじめているのだ。

しかし、紫苑はその動きを見守った。

細胞分裂を続け、肉を増殖させていく残骸であったが、それが元通りになることはなかった。肉の塊と化してしまったのだ。

肉塊から蟻が溶けたような手が伸びた。

速やかに躲し、紫苑は妖系で肉塊の腕を斬った。

本体から斬り離された腕は枯れて消滅したが、本体は尚も生命力を誇っている。それはまるで単細胞生物のようだ。

脊髄反射的に獲物への攻撃を仕掛ける。すでに知性ある生物とはいえないようだ。

紫苑は飛び退き肉塊との距離を置いた。

水泡が膨れ上がるように肉塊が蠢いている。

妖女は消滅したのか、姿を消したのか？

紫苑は気配を感じ、振り返って人影を確認した。

白い防護服を着た集団。感染症などを防ぐために、完全防備で近づいてくる。

「あれが？」

と、防護服の男がマイク越しに尋ねてきた。

紫苑は深く頷き、

「それを調べるのはあなたたちの仕事だ」

茶色いローブを翻し、紫苑は風のように去って行った。

紫苑の仕事はこれで終わった。あとは彼らが仕事を引き継ぐだろう。

そして、この事件を気に紫苑もまた……引き継いだ。

例年になく蒸し暑い夏の日だった。

前触れもなく首都東京を襲った未曾有の大地震。直下型の地震は震度八を記録し、多くの二次災害と死傷者を出した。けれど、それは前触れでしかなかった。

地震により倒れるはずのない東京タワーが倒壊し、山手線の線路が分断された。

そして、聖戦がはじまったのだ。

人智を超えた存在の戦いは、地震以上の被害を東京にもたらした。聖戦の果てに死都と化した東京に代わり、首都は東京から霊的磁場の強い京都へと移された。

しかし、なにが戦いを繰り広げられていたか、未だに確認ある答えは出ていない。

東京が死都と化した。それだけが確認ある事実であり、現実だった。

この聖戦と呼ばれる戦いの終戦と同時期、関東には女帝と名乗る者が巨大都市を築いた。それが帝都エデンだ。

どこの誰とも知れぬ、謎の指導者のもとでも都市は発展した。それは女帝の絶対的な力と、彼女がもたらした“魔導”のためだ。

帝都エデンは世界政府に反対されながらも独立国家を名乗り、

「魔導の力がもたらした恩恵は科学との融合により、帝都エデンを発展させた。」

「発展の象徴は多くあるが、魔導産業で成功したのは女帝のお膝元と呼ばれるマドウ区だろう。」

「都市として発展したのは、東京からの文化が流れ込んできたホウジユ区が象徴的だ。」

「神原女学園の制服を着た少女は、ギガステーションホウジユのホームで待ち人をしていた。」

「巨大なホームに到着するのは超伝導リニアモーターカーだ。」

「少女のボーイッシュなショートヘアとチェックのスカートが風に揺れた。」

「リニアモーターカーが緩やかに停車して、転落防止のドアと車体のドアが開かれた。」

「少女は左右を見回した。」

「車内から次々と人が降りてくる。そんな中において、特別変わった格好をしているわけでもないのに、なぜか目立つ長身の女性。」

「極端に短いスーツのスカートからしなやかな脚を伸ばし、その女は少女を見つくと同時に駆け寄ってきた。」

「つかさちゃん、久しぶり！」

「ストップ、抱きつかないでください」

「つかさはさつと後ろに脚を引いて、抱きつかうとしていた女の躰を避けた。」

「スキンシップを躲された女は顔をぶくつと膨らませた。」



「つかさちゃんなんだから、「つかさちゃんらしく」してよ」  
「相手が亜季菜さんですから」

「アタシ以外のときはちゃんとつかさちゃんしてるわけ？」

「ええ、当たり前です」

「想像できない」

「……………」

つかさは難しい顔をして押し黙り、その沈黙を無理やり破るように話題を変えた。

「こないだの件はどうなりましたか、伊瀬さん？」

影のように亜季菜の横に立つダークスーツの男性。亜季菜の秘書兼ボディーガードだ。

「その話は他の場所に移ってからしましょう」

眼鏡を直しながら伊瀬は二人に先を促した。

駅ビルから用意していた車に乗り込み、伊瀬の運転でホウジユ区から隣のカミハラ区に向かう。

車中でつかさは質問の続きを伊勢に尋ねた。

「アレの検査結果は出たんですか？」

「サンプルから複数のDNAが検出しましたが、そのひとつがホストだと思われまます」

信号待ちで停車した伊瀬は、ノートパソコンを後部座席のつかさに渡した。

ディスプレイに表示された3Dポリゴン。3DでモデリングされたDNAの塩基配列が分裂を繰り返し、徐々に生物としての形をつくって行く。

モデリングされた生物を見て、つかさは神妙な顔をした。

「これは？」

「DNA情報を元に生物の形を復元したものです」

伊瀬はゆっくりとアクセルを踏みながら言った。

つかさの横に座っていた亜季菜がディスプレイを覗き込む。

「アタシよりナイスバディじゃない！」

ディスプレイに映し出されていたのは妖艶たる美女だった。

それはまさに紫苑が一戦を交えた相手。あの妖女そのものだったのだ。

これが意味するものは？

つかさはノートパソコンを伊瀬に返した。

「こいつがウイルスのホストということですか？」

「そうですね、我々はそう考えています」

伊瀬の声を聞きながら、つかさは窓の外を眺めた。

朱空に蒼いカーテンが掛けられようとしていた。

流れていく住宅街の背景が止まった。

目的地に到着して車を降りようとしていたつかさと、窓ガラ

ス越しに道路を歩いていた女子高生と目が合った。

車を降りたつかさのスイッチがオンになる。

「やつほーもみじ！」

つかさは小走りで駆け寄り、同級生の紅葉もみじに両手を広げて抱

きついた。

そんな光景を見ていた亜季菜がボソツと呟く。

「あれがつかさちゃん……クスッ」

亜季菜に接するつかさとはまるで別人だ。

つかさはニコニコ笑顔を浮かべて、車から降りた二人を紹介した。

「ウチの義理の姉ちゃん、亜季菜姉ちゃんと、その彼氏の伊瀬さん」

突然、彼氏の役回りを押し付けられた伊勢は苦い顔をしながらも、紅葉に軽く会釈をした。

おしとやかな雰囲気醸し出す紅葉は、才女の微笑を浮かべて小さく会釈を返した。

「はじめまして、あまみやちのみじ雨宮紅葉です」

雨宮紅葉はつかさと同じ学園に通う同級生だ。

紅葉は制服姿のままマンションから出てきていた。それも少し急いでいるようなそぶりを見せている。

「実はわたし急用がありまして、また今度時間があるときに……では失礼します」

背を向けて走り出す紅葉につかさは手を振った。

「ごめん、引き止めちゃって。またねん紅葉！」

紅葉の姿が曲がり角に消えると、つかさの表情からふっと明るさが消えた。そんなつかさを見ていた亜季菜がクスッと笑う。

「多重人格だったの？」

「……違います」

紅葉に接していたときとは違い、とても淡泊な口調だ。

つかさはなにも言わず、亜季菜を置いてマンションの中に入って行ってしまった。

慌ててつかさの後を追う亜季菜と、慌てることなく後を追う伊瀬。

エレベーターで階層を上がり、廊下を早足で歩くつかさの足が止まった。

ドアの鍵を開け部屋の中に消えるつかさの姿。ドアは客人を迎えずに閉じられた。決して無礼を働いたわけではない。つかさの役目はここで終えたのだ。

代わりに開かれる隣の部屋のドア。

ドアの隙間から覗く幼い少女の顔。メイド服を着た金髪の少女が蒼い瞳で亜季菜と伊瀬を見据えていた。

「お待ちしております。愁斗様がお待ちでございます」

「アリスちゃん久しぶり！」

抱きつこうとして来た亜季菜の躰をさつと避け、アリスは二人の客人を部屋の奥へと促した。

一日に二度もフラれた亜季菜はぶくつと顔を膨らませながら、次こそはとりビングで待つ人物に抱きつく準備をしていた。

リビングで亜季菜たちを出迎える細身の影。

「お久しぶりです」

その口調は、淡白なつかさの口調の酷似していた。

「愁斗くん久しぶり！」

両手をいっぱい広げた亜季菜が愁斗に飛びつく。

が、しかし！

「ストップ、抱きつかないでください」

それはつかさのセリフとまったく同じだった。

シヨックを受けた亜季菜はソファにどっしりと腰を下ろした。  
「紅葉ちゃんに見せたつかさちゃんと愁斗くんが同一人物だなんて……信じられない」

「傀儡はそれぞれ個性を持っていますから、僕はそれを具現化しているにすぎません」

愁斗は形のよい唇を綻ばせ微笑んだ。

続けて愁斗は、

「実は急用ができました。僕は部屋に籠もりますが、お二人は寛いでいてください。あとは任せたよアリス」

「承知いたしました」

恭しくアリスは愁斗に一礼し、愁斗は自分の部屋に消えてしまった。

代わってすぐに愁斗の部屋から出てきた謎の影。

茶色いローブを羽織り、白い仮面を被った者 紫苑だった。

ベランダに出た紫苑は躊躇なくフェンスを飛び越え、地上へと姿を消してしまった。

亜季菜は紫苑の背中を見送って深くため息をついた。

「久しぶりだっていうのにもお。アリスちゃんビール持って来て、今日はとことん飲むわよ！」

亜季菜はスーツのジャケットを投げ捨て戦闘準備万端だった。

黄昏の空は蒼に沈もうとしていた。

おぞましい形相を浮かべた 般若面 に反射する夕焼けの朱。  
般若面 を被ったその下の姿は、神原文学園の制服であっ

た。

「貴様、そこを退け！」

般若面 の怒号がピルの裏口に立つ大男に浴びせられた。

「さつさと帰りやがれ！ 変なお面なんか被りやがって……」

男は唾と共に言葉を吐き捨てた。

憤怒する 般若面 が牙を剥く。

「退け、木偶の坊！ 退かないならコロス！」

「やれるもんならやってみな！」

大男は指を鳴らし、ニヤリと下卑た笑いを浮かべた瞬間だった。

風が唸った。

噴き出す血汐が 般若面 を鮮血に染める。

大男の首が止まらぬ血を噴出した。

般若面 を被る少女の手に握られている裁ち鋏から滴る紅

い雫。

その裁ち鋏は布ではなく、肉を斬るために手を加えられた鋏。内刃だけでなく、側面を研磨された両刃の鋏だったのだ。

崩れ落ちる軀を尻目に 般若面 の少女は地獄の扉を開けたのだった。

ヘヴィメタルのBGMが耳を攻撃し、半裸の男女が叫びながら踊り狂っている。般若面 の少女が室内に侵入したことに気付く者はない。気付いたとしても、気に留めるものもないだろう。

強烈なドラッグでトリップして、悪魔に魂を売り飛ばす。

現代版のサバトが行なわれていたのだ。

人ごみを掻き分けて 般若面 の少女は奥の部屋へと足を進めた。

裁ち鉄を隠し持つ少女の手は汗ばんでいた。この先に待ち構える敵を感じているのだ。

ドアを守る男の頸動脈を切り裂き、 般若面 の少女は奥の部屋へと踏み込んだ。

下男たちを従え、妖女は長椅子に腰を掛けていた。

「血の香を纏う般若の化身か……妾になに用じゃ？」

玲瓏たるささやきが、近くにいる男どもを惑わす。

胸元が大きく開かれた黒いレザースーツに身を包む女。その女、紫苑と一戦を交えた謎の妖女であった。

般若面 の少女は辺りを見回しながら激怒した。

「貴様らが攫った生徒はどこだ！」

妖女は不思議な顔をしながら思考をめぐらせ、ふと邪悪な笑みを浮かべた。

「ほほほほっ、汝と同じ制服を着た女がいたな。彼奴か、彼奴を探してここに着たのかえ？」

「そうだ、彼女を返せ！」

「それはできぬな」

「なぜだ！」

般若面 の少女が強く詰め寄ると、妖女は艶笑した。

「あの女は妾の咽喉を潤してくれたぞよ。処女じゃった」

「犯したのか！」

「血を飲んだ」

「外道がッ！」

叫び声をあげて 般若面 の少女が妖女に襲い掛かった。妖女を守るように三人の男が壁となる。

裁ち鋏が肌を裂き、肉を抉り、鮮血が雨のように降り注ぐ。壁は人間だった。特殊な力を持っているわけでもない、ただの若者だったのだ。

軀の山を目の前にして、ただひとりこの場で笑う妖女。

「よい薰りじゃな」

妖女は顔に跳ねた血を手の甲で拭い、その手を妖しく伸ばされた舌で舐め取った。

その瞬間、妖女の眼が朱色に輝いたような気がした。

「人外の魔性か……」

と、呟く 般若面 の少女に対して、妖女もまた呟く。

「般若面に宿りし怨霊……汝も人外じゃるうて」

「……うるさい！」

なにが 般若面 を憤怒させたのか？

般若面 の少女が妖女に飛び掛かった。

余裕か嘲りか、妖女は裁ち鋏の一刀を手で受けた。

しかし、手では鋭利な刃を受け止めきれず、鮮やかに指が落ちた。

般若面 は燃え揺る瞳でしかと見た。

切り落とされた妖女の指が再生する。

「斬っても無駄じゃ。たとえ灰になろうとも死なぬ」



それは不死ということか？

その言葉を理解しながらも 般若面 の少女は再び攻撃を繰り出す。

妖女は両手を広げ無防備な姿を晒した。

渾身の一撃が妖女の心の臓を突く！

妖女は艶笑していた。

心臓を刺されながらも微動だにせず、艶やかな笑みを浮かべているのだ。

「避ける呉葉くれは！」

誰が叫んだのか？

妖女が大きな口を開き乱杭歯を剥いた。

心臓に裁ち鋏を突き刺し、妖女に寄り添い重なる 般若面

の少女の首筋に、妖女の毒牙が襲う。

避けるには間に合わなかった。

しかし、それよりも早く煌いた輝線。

妖女の首に奔る輝線は一変して紅く転じ、ずるりと首が墮ちたのだ。

墮ちた首は嗤っていた。その瞳は部屋の奥に立つ美影身に向けられている。

傀儡士紫苑。

「偶然だな」

眩く紫苑。

そう、偶然だった。

決して紫苑は妖女を追って来たわけではなかった。

般若面 の少女 呉葉は妖女と問合いを置いて、現れた紫苑に視線を向けた。

「また……助けられたな」

その口調に恩義はない。

紫苑は妖女に向けていた視線を呉葉に一瞬だけ向けた。

「制服は着替えるといつも言っているはずだ。足がつく」

「うるさい、一刻を争う事態だったんだ」

しかし、それも最悪な結果として終わってしまった。

妖女は床に堕ちた首を拾い胴に乗せると、動きを確かめるように首を回した。もう首には傷痕など残っていない。

紫苑は妖女を見据えていた。けれど、声は呉葉に掛けられた。

「ここは引け、勝てる相手ではない」

「冗談じゃない、引けるものかッ！」

妖女への怨みが沸々と腸を煮え繰り返す。

呉葉が再び妖女に刃を向ける。

だが、それは紫苑によつて止められてしまった。

刹那にして振るわれた妖系が呉葉の肢体を拘束した。

「なぜ止める！」

「勝ち目がない……私にも」

その紫苑の言葉を聞いて、妖女は大そうな笑みを浮かべた。

「おほほほ、妾に恐れをなしたかえ？」

「違う」

紫苑の声に恐れは含まれていない。

「今は勝つ術がない。それだけのことだ」

首を飛ばしても死なない。

先に一戦を交えたときも、妖女は成れの果てに変貌を遂げたが、その妖女は今ここにいる。前の妖女は本物だったのか？

ひとつはつきりしているのは、通常の攻撃では倒せそうもない。

紫苑の手から妖系が豪雨のごとく放たれた。

倒せぬとわかっていてなぜ振るう？

妖女も死なぬとわかっているためか、避ける仕草も見せずに連撃を全身に浴びた。

柔肉が細切れになり、血溜まりが床を浸蝕する。

床の肉塊は、あのときのように肉塊のままではなかった。

肉塊を土壌として、骨が枝のように伸び、内臓が果実のように実ろうとしていた。

妖女は生成しようとしていた。

だが、それを待っている理由はない。

紫苑は妖系に拘束された呉葉を抱きかかえ、出口に向かって疾走した。

「放せ！」

抱きかかえられている呉葉が叫んだ。けれど紫苑は耳を貸さない。

ドラッグと音楽に酔いしれる若者たちは、部屋の奥で事件が起こっていること知る由もないようだった。

紫苑は人ごみの中を掻き分け、建物を出て裏通りに姿を見せた。

空はダークブルーに染まり、星々が妖しく輝いている。  
疾走する紫苑に抱きかかえられた呉葉が喚く。

「勝つ術がないなど嘘だ！ なぜ戦わない！」

「……さて？」

「貴様には召喚があるだろツ！」

傀儡士の奥義 召喚。

「あの場所では召喚も使えまい」

それも一理ある。強大な存在が“こちら側”に現れれば、周りはただでは済まない。狭い部屋は当然のごとく破壊され、壁を隔てた一般人にも危害が及ぶことは必定。

だとしても、呉葉は納得しなかった。

「なにが目的だ！」

「術を整えてから挑む……それだけのことだ」

紫苑の脳裏に再生させる妖女の言葉。

蘭魔。

自室にこもっていた愁斗は暗闇から明るい廊下へと出た。

鼻に香るアルコール臭。

酒臭い。

愁斗が姿勢の良い歩き方でリビングまで行くと、脚を広げてソファに座っている亜季菜の姿があった。

「ペースが早いですね」

愁斗はそう諭しながらローテーブルの上に捨てられた空き缶を眺めた。

五〇〇ミリリットルのビール缶が一〇つ潰れている。

ビールに飽きたのか、亜季菜はワインを瓶のままラッパ飲みしていた。

「愁斗もこつち来て飲みなさいよあ〜」

語尾の伸び具合が酔っている証拠だ。

「ボクは未成年ですから」

「そんなこと言わないでよあ、伊瀬くんったら『仕事中ですか』とか言っちゃって付き合ってくれないんだも〜ん」

その伊瀬はすぐそこのキッチンでツマミを作っていた。

二人ともまるでこの家の住人だ。

愁斗は部屋を見回して、一人足りないことに気付いた。

「アリスは？」

キッチンから出てきた伊瀬が愁斗の横を通り過ぎながら言う。

「なにも言わず出かけて行きましたよ」

「……なるほど」

愁斗には思うところがあつた。おそらくこの客人が好きではないのだろう。愁斗の視線は服を脱ぎはじめた亜季菜に向けられた。

あんなだらしのない女ひとでも、アリスが面と向かつて文句を言うことはないだろう。アリスの主人である愁斗を「飼っている」人物なのだから。

彼女がこんなところで酔っ払っている今も、彼女の資産は着実に増えている。

亜季菜に服を着させようとする伊瀬を見て愁斗はため息を吐

いた。

「伊瀬さんはなんでそんな人に仕えてるんですか？」

「あなたと同じですよ愁斗さん。私も拾われたのです。私の場合は亜季菜様のお父上ですが……」

「まだ姫野ひめの家に仕えているわけは？」

亜季菜の父はすでにこの世を去っている。

「返せていない恩義を、娘の亜季菜様に返しているのですよ」

「こんな人じゃなくて、亜季菜さんのお姉さんに仕えればいいのに」

亜季菜はすでに寝息を立てて安らかな顔をしていた。二人の会話も耳に届いていないようだ。

伊瀬は亜季菜の身体を抱きかかえた。

「ベッドをお借りしてよろしいでしょうか？」

「はい、自由に使ってください」

背中を見せて消える伊瀬の姿を視線で追いながら、愁斗は深く息を吐いて眼を瞑った。

しばらくして伊瀬が一人でリビングに戻って来た。

「おそらく朝まで目を覚まさないと思います」

「そうですか……あの人、いったいなにに来たんですか？」

お酒を飲んで、勝手に眠って、朝まで起きない。これではいつい何の用で来たのかわからない。

「いつもと同じですよ。突然、仕事の途中で愁斗さんの顔が見たいと言い出し、仕事をキャンセルして来ました」

「亜季菜さんの下で働いている人たちが可哀想ですね」

「亜季菜様の顔も見たことのない社員がほとんどですから、大丈夫ですよ」

その言葉の意味は社員数の多さを意味していた。

伊瀬は言葉を付け加えた。

「ユウカ様がしつかりしておりますし」

姫野ユウカ その名は姫野グループの会長の名前だ。

帝都には“帝都の資源”で財を気付いた金持ちが多くいる。

姫野グループもその一つだ。

有名な帝都成金を上げるとしたら、医療技術で成功した秋影家、魔導産業で成功した神星家、貿易で成功した姫野家が上げられるだろう。

沈黙が続いた。

愁斗も伊瀬も自ら口を開くタイプではない。

静かな表情を伊瀬に対して、愁斗は難しい顔をして柳眉を寄せている。

そして、愁斗は伊瀬に顔を向けた。

「調べて頂きたいことがあるんですが？」

「なんででしょうか？」

「こないだのウィルスの件です。過去に似たような事件はなかったんですか？」

「ありました」

返事は即答だった。

「ただし、同じという確証はありません。多額のお金が動く話ですから、どこも非公開に調査をしているようです」

新型のウイルスは金になる。

「……なるほど」

呟く愁斗の脳裏に浮かんだ。

「生命科学研究所にデータがある可能性は高いですね」

“生命科学研究所”というキーワード。

秋影コーポレーションが出資している施設であると共に、政府とのパイプも太い施設だ。外部から情報を手に入れるのは難しい。かと言って侵入はもつと難しい。

亜季菜のコネクションを使って情報を手に入れるのは不可能だろう。出来るのなら、とづくにしているはずだ。

帝都で情報を手に入れるためには情報屋を頼るのがいいだろう。けれど生命科学研究所の情報となると、トップクラスの情報屋が必要になるだろう。トップクラスだとして情報を手に入れるかとは不明だ。

表向きの帝都トップクラスの情報屋といえば、ミナト区のツインタワーに事務所を構える真という名の情報屋だろう。

ただしあの情報屋は客を選ぶと有名だ。

「サイバーフェアリーにアポ取れますか？」

愁斗の言うサイバーフェアリーとは真の事務所の名前だ。

「無理です」

「なぜ？」

「彼は個人の仕事しか請けません。企業と関係があると思われる人物の仕事も請けないそうです。彼は情報屋ですから、客の身元調査も完璧です」



「何度か接触しようとして失敗したとか？」

「ええ、企業としては彼を手元に置きたいと考えるでしょう。わが社もそのひとつということですよ」

「……なるほど」

愁斗の傀儡で仕事を頼むのは不可能だろう 身元がない。

偽造しても見抜かれるだろう。

愁斗本人で仕事を頼むのはリスクが多い。下手に身元調査をされるのは身の破滅に繋がる。

リスクが大きすぎるとなれば、別の方法を考えるしかない。

「サイバーフェアリー以外に生命科学研究所のデータを手できそうな手段はありますか？」

「あれば我々がやっています」

「……やはり」

愁斗は小さく頷いて押し黙った。

そして、ふと思いついたようにハツとした顔をした。

「そうだ、彼女を縛ったままだ」

呉葉を縛ったままだったことを、すっかり忘れていたらしい。

翌日、田中という男はツインタワービルに来ていた。

帝都の東端に位置するミナト区にそのビルはある。

ミナト区はリニアモーターカーが停車するギガステーションがあることや、千葉県が東京湾を挟んでいることから、帝都でも三本の指に入る大都市だ。

帝都最大の臨海公園を見下ろすように立っている通称ツイン

タワービル。正式名称は黄昏の塔というが、その名前はあまり知られていない。

ツインタワービルはノースとサウスに分かれる一〇〇階建ての双子ビルだ。帝都でもっとも夕焼けが綺麗に見える場所としてデートスポットになっているほか、ノースビルはショッピングビルとして機能しているため、観光マップでも大きく取り扱われている。

ノースビルには帝都で一般的に買える物ならば、全て取り揃っていると言ってもいいだろう。もちろん武器も売っている。

サウスビルは企業ビルである。このビルの四六階にサイバーフェアリー電脳妖精のオフィスがあった。

アポイントメントは取っていない。

田中は受け付けの女性を一瞥すると、さもその行動が当たり前のように、奥の部屋に入ろうとした。

「勝手に入られては困ります！」

受け付けの女性がカウンターから飛び出し、田中の前に両手を広げて立ち塞がった。

「所長の真さんにお会いしたいのですが？」

「アポのない方は困ります！」

「そこをなんとか」

「紹介状の提示と身元調査をパスした方しか依頼は受けられない方針です」

「そこをなんとかありませんでしょうか？」

粘り強く受付嬢に迫るが、どうにも折れそうにない。

田中は受付嬢から目を離し、天井の隅に取り付けてあるカメラに顔を向けた。

「某生命科学研究所の情報を手に入れられるのは、ここだけだと聞いてきたのですが？」

答えはすぐに返ってきた。

スピーカー越しに男の声が聴こえる。

《その人を通してあげて》

おそらくこの声の主が真という名の情報屋だろう。

受付嬢にドアを開かれ、田中は奥の応接室に通された。そこにはインテリ風の女性がソファの横に立っていた。

「秘書の倉敷と申します。どうぞ、そこにお掛けください」

秘書に促されて田中は座り、すぐに向かいのソファに座るといふか浮いている丸い球体に目を奪われた。

ソフトボールほどの球体にはカメラが内蔵されていた。

噂どおりだ。

真はクライアントの前につきさし姿を見せないらしい。今、目の前に浮いている球体が真の代わり、真が操っているのだ。

球体から声がした。

《生命科学研究所とは、カミハラの研究所のことかい？》

「そうです。とあるデータを入手していただきたいのです」

《仕事を請けるかどうかは、君の身元調査をしてからだな。名刺をいただけるか？》

田中は名刺を差し出し、球体がスキャンを終えると、速やかに秘書が名刺を受け取った。

「少々お待ちください」

と、秘書が言ってから一分ほど経ち、球体から声が聴こえた。《二〇××年生まれ三八歳、子供は二人か。身に疑問はないが、生命科学研究所のどのデータが必要なのかい？》

「ウイルス情報です。脅威の再生力を人に与える代わりに、人を異形に変えるウイルスです。先日、帝都警察がマドウ区で感染者を捕獲したと噂があります」

《あれのことか、多くの企業がすでに動いているらしいな》  
すでにウイルスについてある程度の情報は握っているらしい口ぶりだ。

「過去にも同じようなウイルスが事件を起こしたらしいのですが、その過去について詳しい情報を手に入れてもらいたいのです」

《ならば生命科学研究所にこだわる理由はないように思えるが？》

「別にこだわってはいません。生命科学研究所以外からも情報を集めてもらいたいのですが、多くの情報を持っているのはあそこだと思えます」

《調査はしよう。ただし、手に入れた情報を君に渡すかは、君の素性を詳しく調べたあとだ》

真は言葉を付け加えた。

《もうひとつ、生命科学研究所のデータを手に入れられる可能性はゼロパーセントに近い》

「やはり帝都ナンバー1ワの情報屋でもあそのデータを手に入

れるのは難しいですか……」

ナンバー1が手に入れられないのならば、ナンバー2以下は不可能に思われる。帝都は何事にも変動の激しい街だ。情報屋のランキングは常に変動する。その中であって不動なのはただひとり、ナンバー1の真のみなのだ。

しかし、真は少し不快そうな態度をした。

《失敬だな。生命科学研究所のデータを手に入れるなど、眠っ  
ていてもできる。だが、現状では難しいだけだ》

「なぜですか？」

《数日前から生命科学研究所の全データが外部から遮断された  
からだ。僕はネットワーク専門の情報屋だからな。人を介して  
情報を手に入れるのは得意ではない》

人を介す情報収集が得意ではなくても、帝都ナンバーワンを  
不動にする。それはいかに今の時代がネットワークと密接に繋が  
つているかを現している。

「どうして外部から遮断されたのですか？」

《ハッキングさらたからだ》

「えっ？」

田中は思わず驚きの表情を露わにした。

帝都ナンバー1以外にも、生命科学研究所にハッキングでき  
る人物がいるとうことか？

《もちろんハッキングしたのは僕じゃない。足が付くような真  
似はしないからな》

いったい誰がハッキングしたのか、真には心当たりがあるよ

うだった。

《僕と対等に張り合えるハッカーはひとりしか知らない。ルシフェルというHNの人物だ。あの場所にハッキングできるのは僕かあいつくらいのものだろう。ただし、あいつの犯行にしては雑だ。あいつは僕以上に証拠を残さないタイプだからな》

では別の人物がいるのか？

ソファの横に微動だにせず立っていた秘書が動いた。腕時計を確認しようだ。

「所長、次のクライアントがそろそろやってきます」

《そうか、では今日のところはお帰り願おう》

田中は球体に頭を下げた。

「依頼の話、どうぞよろしくお願いします」

《依頼は請けんよ。調査はするがな》

「はい？」

《君の身元が怪しいからだ。君は三時間前に死んでいる》

「さすがは帝都ナンバーワン、もうお調べになりましたか。なら仕方ありません、では失礼します」

田中は再び頭を下げて応接室をあとにした。

オフィスを出た田中はしばらく歩き、突然糸が切れた操り人形のように崩れた。すぐ近くにいた人が脈を測るが、死んでいた。

田中という男は、三時間前に死んでいたのだ。

帝都ナンバーワンの助けは諦め、愁斗はいつもどおり自ら情

報集をした。

ルシファーというHNの人物は、サイバーフェアリーと同時期にネットを賑わした伝説のハッカーだ。ただし、サイバーフェアリーに比べ、世間での認知度は低い。なぜならば、サイバーフェアリーが大胆であり、クラッカー寄りであるのに対して、ルシフェルは自らの存在を公にせず、忍び寄る影のようにハッキングをするのだ。

のちにサイバーフェアリーは帝都公安に逮捕され、その正体が明るみ出たが、ルシフェルの正体は未だに謎のままだ。

キーボードを打つ手を止めて、愁斗は真っ暗な部屋で瞑想した。

廊下を歩く音が微かに聴こえた。

足音は愁斗のいる部屋の前で止まった。

ノックの後に声がある。

「愁斗さん、お時間よろしいでしょうか？」

伊瀬の声だ。

静かに愁斗は瞳を開けた。

「はい、少し待ってください」

愁斗は椅子から立ち上がると、部屋のドアを開けて廊下に出た。

見上げた伊勢の顔は気難しそうだ。

「何のようですか？」

「帝都警察が麻薬の一斉摘発をしようと集会所に乗り込んだところ、大変な事態が起きました」

「どんな？」

「あの新型ウィルスの巣窟になっていたそうです。加えて感染者全員がDNDの復元モデルに変身してしまつたとか……」

通常の異形と化した感染者よりも、あの妖女に変身した方が厄介なのは先の戦闘で証明されている。それもその場にいた感染者が、全員あの妖女になるとは、帝都警察も装甲車両を呼ばなくてはならないかもしれない。

しかし、愁斗はこう考えている。感染者が妖女に変じた存在は、あくまでオリジナルではない、オリジナルの能力を持っていない。

プレッシャーが違うのだ。はじめて遭つた妖女と、二度目に重逢つた妖女は各が違う。若者たちが踊り狂つていたあの場所にいた妖女こそが本物だろう。

偽者の相手などしてられない。オリジナルのホストを一刻も早く探す必用がありそうだ。

オリジナルを探すといつても、どこにいるのかわからない。

まずは事件現場に向かうのがいいだろう、と愁斗は考えた。

「事件現場はどこですか？」

「マドウ区です。マップを愁斗さんのPCに転送しますね」

「ありがとうございます」

礼を言つて愁斗はさっそく部屋に引きこもつた。

代わつて部屋から飛び出した紫苑が現場に向かう。

マドウ区は女帝のお膝元とも云われ、魔導産業で栄えた街だ。



外から魔導師たちの移民も多く、居住地区と産業地区に分かれている。居住地区の一角は魔導成金の屋敷が立ち並び、ゴシックやバロック建築などの芸術性に富んだ屋敷も多く見られる。紫苑がやって来たのはマドウ区がもつとも魔導区らしい場所。毒々しい紫や桃色の煙を立ち昇らせる煙突や、危険な香りを孕んだ空気。

排水溝で弾けた気泡は悪臭を放ち、スライムに酷似したブラックウィーズが溝から外に這い出す光景も見られた。

この場所に魅入られる魔性は人だけはない。妖物もまたしかり。

紫苑がやって来たのはマドウ区の北東に位置する場所だ。この場所は帝都中枢ミヤ区と住宅都市カミハラ区が隣接し、少し先には大都市ホウジュ区がある。マドウ区の入り口であることから、マドウ区特有の文化はあまり見られない。

が、ホウジュ区、マドウ区、ミヤ区を結ぶ通称“HMMトライアングル”地帯であるこの場所は、犯罪率、妖物出現率が帝都でもトップクラスの場所だ。

複数の銃撃音や小型マシンバルカンの連射音が聴こえた。

場所は工事現場手前の二車線道路だ。

工事現場からぞろぞろ出てくる偽妖女を相手に、機動警察が攻防戦を繰り広げていた。

銃弾を妖女たちの身体を貫通するも、傷痕は一瞬にして塞がってしまう。

陰から様子を窺っていた紫苑は、工事現場の中に入るチャン

スを窺っていた。

あの中から偽妖女が出てくるということは、その先に本物がある可能性がある。

たしかあの工事現場は数年前から廃墟と化していたはずだ。度重なる呪いにより工事が中断し、撤退した業者が売りに出したが買い手が付かず、今は反社会的な者たちが集まる溜まり場になっていているらしい。

銃弾の雨が降る中、紫苑が装甲車の真上を飛翔した。

幾線もの煌きが奔り、偽妖女たちの肉体を切り刻み、血の海を紫苑は越えた。

数え切れない銃弾を躲そうとするも、背中に浴びる銃弾の数は数知れない。それでも紫苑は先を急いだ。当たり所が悪くなければ問題はない。

工事現場の資材を尻目に紫苑は建築中のデパートに乗り込んだ。

湧き出る偽妖女をなぎ倒し、地下の駐車場を目指した。その場所から偽妖女が湧き出している。

地下に鳴り響く紫苑の足音が止まった。

偽妖女に囲まれて経つ妖女。プレッシャーが他の妖女とは違う。

「また会ったな」

玲瓏たる妖女の声。

本物だと紫苑に核心させた。

ならば紫苑は訊かなくてはならない。

「おまえに訊きたいことがある。蘭魔について……」

「憎き男……蘭魔。妾から片腕を奪い、屈辱を与えられた。妾は蘭魔に復讐するために現世に蘇ったのじゃ」

生成しない片腕は類稀なる神技の成した業。傀儡士である愁斗の父　蘭魔が放った妖系によるものだったのだ。

因縁を感じた紫苑の口はおのずと開いていた。

「もし、私は蘭魔の血縁だと言ったらどうする？」

妖女に戦慄が奔った。狂気に歪む般若の形相。怨みと怒りが、妖女の口元から鋭い乱杭歯を覗かせた。

「腸を抉り出し、全身の血を嚼り、最後は八つ裂きにしてくれる！」

妖女が従えていた偽妖女が一斉に紫苑に飛び掛かる。

紫苑はすで見抜いていた。

織手から放たれる輝線は偽妖女たちの頭部を狙っていた。いや、性格には頭部ではなく脳だ。

脳を破壊された偽妖女は生成プログラムを誤作動させ、ぶよぶよの肉塊へと変わっていく。最初に偽妖女と戦ったときと同じ現象だ。

たちまち辺りは肉塊だらけになってしまった。

立っているのは紫苑を妖女のみ。

「おのれえッ！」

狂気に腸を煮え練り返す妖女は長い爪を向けて紫苑に飛び掛かってきた。

動じぬ紫苑は一線を繰り出した。

妖女の脳天から股に紅い線が滲んだ。

次の瞬間、ずるりと妖女の躰が縦に割れたのだ。

地面に崩れる妖女を見下す紫苑。

しかし、まだ終わっていなかった。

妖女は紫苑を見て割れた顔でニタリと嗤った。

割られた躰の断面から細い繊維が伸び、絡まる繊維が二つの躰を結びつけた。

そして、妖女は脅威の復活を遂げたのだ。

斬られたのは着ていた服のみ。

妖女は斬れた服を脱ぎ捨て、生まれたままの裸体を紫苑の前に晒した。

「妾を甘く見るでない。汝の業など痛くも痒くもない」

紫苑の業が効かない。

果たして紫苑に勝ち目はあるのか？

そのときだった。

静かな囁きが地下に響いた。

「シャドービハインド」

刹那、紫苑は背後に気配を感じ、銃声が地下に木霊したのだ。  
った。

銃弾を受けてよろめいたのは妖女だった。

血を撒き散らす妖女の顔半分は悲惨だった。まるで銃口の大  
きいライフルを近距離で発射されたように、顔半分がぶっ飛ん  
でいたのだ。

銃を構えた男は紫苑の真横にいた。

長く伸びた脚はレザーパンツに包まれ、薄手の黒い長袖はボタンを大きくはずされ、青白い肌が覗いている。その胸元に刻まれた十字の刺青。

紫苑はこの男に察しがついた。

「……るると 溜流斗だな」

紫苑の問いかけに青白い顔に浮かぶ紅い唇が囁いた。

「そうだよ。キミは？」

「……紫苑」

「ふむ、同業者か……」

裏社会ではどちらの名も有名だ。

二人が会話を進める最中、妖女の顔は再生の兆候を見せていなかった。吹っ飛ばされた断面は、蟲が奥で這うように蠢いているが、脅威の生成力は発揮されてない。

妖女は残った口をガチガチと鳴らした。

「なぜじゃ、なぜ傷の治癒が遅いのじゃ！」

吹っ飛ばされた顔半分は再生していかないわけではなかった。

少しずつ再生しており、人間の治癒に比べれば驚異的な速さだが、妖女が本来持っている治癒力には遠く及ばない。

溜流斗が悪戯に囁く。

「ボクが撃った弾は呪弾だよ。怨霊によって呪われた銃弾。この銃弾を喰らって再生するなんて、大したものだね」

溜流斗はゆっくりと銃口を下げて、腰のホルスターに銃を閉まった。その行動を見ていた紫苑が疑問を投げかける。

「なぜ銃をしまう？」

「ここに来るまでに敵が多すぎて、一発を残して全部撃ってしまつたんだよ。なにか文句でもあるかい？」

「……いや」

「ならいいんだ」

三人は自然と間合いを取って、正三角形を描いていた。

これを二対一と数えるか、それとも一対一対一と数えるか……。

正三角形の均衡を崩したのは瑠流斗だった。いち早く瑠流斗が仕掛けた。

「シャドービハインド」

瑠流斗がコンクリの地面に“沈んだ”刹那、彼は妖女の影から這い出していた。

唇が重なるほどの距離に現れた瑠流斗を見て、妖女が片眼を向いたのも束の間、武器と化した鋭い手が首を刎ねていた。

瑠流斗の手刀に飛ばされた崩れ欠けの首は墮ちた。鈍い音を立てながらコンクリに落ち、三回転ほど転がって止まった。

すでに紫苑も仕掛けていた。

放たれた妖糸は肉を切り刻まずに、締め付けることにより妖女の首から下を拘束した。

妖女の脚はきつく縛られ、両腕は胴から離れない。

床に転がる半分の顔で妖女は苦虫を噛み潰した。

「心の臓さえあれば……」

生首から鞭毛のような足が何本も生え、妖女の首は這うよう

に走った。

紫苑を見張った。自分が拘束した妖女の躰が枯れ木のように枯れた。胴体は脅威の生成力を発揮することなく、養分を失ったように枯れたのだ。

「頭が核か……？」

呟く紫苑に瑠流斗は意味ありげに静かな笑みを浮かべた。

気配がした。

紫苑と瑠流斗が視線を向けると、闇の奥から偽妖女が三体、音もなく忍び寄って来ていた。

気付かれた偽妖女が瞬時に素早く動き、紫苑と瑠流斗に襲い掛かる。

目にも留まらぬ速さで紫苑の妖系が妖女を縦割りにし、瑠流斗は妖女の顔面を鷲掴みにして、そのまま妖女の後頭部をコンクリに激しく叩き付けた。

脳を飛び散らせて破壊される頭蓋骨が不気味に音を鳴らした。残る一体の偽妖女は、示し合わせたように妖女の首に向かった。

紫苑と瑠流斗が動いたのはほぼ同時。

しかし、妖女のほうが早い。

なんと偽妖女は自らの頭を果実のようにもぎ取り、切り離されていた妖女の首がそこに乗せられたのだ。

体を手に入れた妖女は憤怒していた。

半壊した顔はおどろおどろしく、それでいて妖艶な雰囲気、相反する美と醜を兼ね備えていた。

「許しはせぬぞ」

妖女が地面を激しく蹴り上げた。

瞬時に瑠流斗がスキルを発動する。

「シャドービハインド」

だが、瑠流斗の躰が自らの影に沈む前に、妖女の手が瑠流斗の腕を掴んだ。半身まで地面に沈んでいた瑠流斗が、沼地から引き上げられるように持ち上げられた。そして、そのまま瑠流斗は投げ飛ばされてしまった。

瑠流斗が地面に着地するよりも早く、紫苑が妖系は妖女を捉えた。

斬つても無駄だと悟った紫苑の妖系は妖女を雁字搦めにした。縛られた妖女はボーリングのピンのように立ち尽くす。だが、その顔は不敵な笑みを浮かべていた。

「姑息な手段じゃの」

その言葉のとおり、一時しのぎにしかならなかった。紫苑は妖女に巻きついていていた不可視の糸が、弾け切れるのを指先で敏感に感じた。

技を打ち破り両手を力強く広げる妖女の前に、紫苑の動きが止まってしまった。微かな気配を感じたのだ。また偽妖女がやってきたのだろうか？

違う。

この場で誰よりも五感の鋭い瑠流斗は気付いていた。

「機動警察が突入してくるよ」

外で偽妖女と攻防を繰り返していた機動警察が、ついに外を



制圧して敵陣に乗り込んできたのだ。

瑠流斗は妖女と紫苑に背向けて走り出した。

「政府に目を付けられる前にボクは逃げるよ」

機動警察はすぐそこまで迫っていた。残った偽妖女と攻防する銃声音が遠くから聴こえる。

紫苑もまた、帝都警察や機動警察、その先にいる政府に目を付けられる行動は控えたかった。

ここはいったん引くしかないのか？

しかし、身を引いたのは紫苑ではなく妖女だった。

「汝には訊きとうことがあるが邪魔が入りそうじゃな。改めてまた会おうぞ、憎き蘭魔に血を引く者よ」

妖女は疾風のように姿を消した。

銃声と共に流れ弾が紫苑の近くまで飛んできた。遠くには機動警察が照らすライトがいくつも見える。

「……あの人がいないのならば、私が奴を倒さなければならぬ」

呟いた紫苑は闇の中へと姿を消していった。

神原女学園の制服を着た女子高生が二人、カミハラ駅前の繁華街を歩いていた。

長く美しい黒髪を風に流しながら歩いているのは紅葉だ。その横を歩いているのはつかさ。二人はカミハラ駅にあるブックストアに向かっていた。

なぜか紅葉は深刻そうな顔でつかさの顔を覗きこんでいた。

「今日も午前中の授業全部サボってどこに行っていたの？」

「ひーみーっ」

深刻そうな紅葉とは対照的に、つかさは意地悪そうな顔で笑っていた。

学校の登校するときは一緒だった。それが一時間目の授業がはじまると、つかさは授業も聞かずに机に突っ伏して眠り、一時間目の終了チャイムが鳴ると同時に起き、どこかに姿を消してしまった。今日だけではなく、似たようなことはしょっちゅうある。

つかさが紅葉の前に再び姿を現したのは五時間目の体育の授業だった。

サボり癖のあるつかさのことが、紅葉は心配で堪らなかった。「中間テストだってもうすぐなのに……それに……」

「それに？」

まん丸な瞳に浮かぶ深い黒瞳でつかさ紅葉を見つめた。すると紅葉は少し頬を桜色に染め、つかさから逃げるように視線を地面に向けた。

「だってそれに、つかさと一緒に一年生になれないと嫌だから」

その言葉を聞いてつかさは頬をフグみたいに膨らませた。

「ぶんぶん、ウチがまるで進級できないみたいない方よしよお」

「だってあまりにもつかさが授業をサボるから」

「へーきへーき、うちの学校は先生たちがあの手この手で無理

やり生徒を進級させようと頑張るもん」

「でも……」

「あつ、そういえば去年の一年生もお金で進級した人たくさんいるって」

「……………」

紅葉は難しい顔をして沈黙してしまった。

そのまま紅葉は無言でつかつかと先を歩いて行ってしまった。慌ててつかさが取り繕う。

「どうしたの、もーみじ！　ウチなにか悪いこと言った？」

「別にいいの……つかさがどんな方法でも一緒に進級できればでも……つかさもお金さえあれば、なんでもできると思ってる人なのかなって……ちょっと思っただけ」

「そんなこと思っていないよお。えつ、なに、紅葉ってお金持ちを目の敵にしているとか？」

「えつ？　うーん……気にしないで、お金で欲望を満たそうとする人が少し嫌いなだけだから」

不思議な顔でつかさが紅葉を見つめていると、紅葉は急に笑顔でファーストフード店を指差した。

「そうだ、本屋さんの帰りにワルド行く？」

「ウンウン、ウチ昼ごはん食べてないからお腹すいてたんだよね」

と、言いながらワルドナルドに視線を流したつかさが、“なにか”を見て少し瞳を大きく開けた。紅葉はその様子に気付いていないようだ。

そのためにつかさの次の言葉に驚いた表情をすることになった。

「ウチさ、急に用事思い出しちゃった。ゴメン、この埋め合わせは……なんか考えとくから、また明日ね！」

「えっ、どうしたの？」

「バイバイーイ！」

慌てた様子でつかさは紅葉に手を振り別れた。

すぐにつかさは影を追った。

駅前のビルの中に消えた細い影。

影は何階に消えたのか？

歩道沿いの店舗ではなく、階段とエスカレーターのある方向に影は消えた。

二階のパソコンショップ、三階の漫画喫茶、四階の居酒屋、五階の飲食店、六階はなにかの企業だ。

あの影が見間違えでなければ、どこにも行きそうにない雰囲気だ。見間違えだったのかもしれない。

それでもつかさは可能性を信じて二階のパソコンショップに向かった。

“あの手の職業”の中には、仕事などでパソコンを酷使用する者も多く、以外にパソコンマニアも多い。

つかさは店内の客達をひとりひとり観察した。外観の特徴だけを言えば、いろいろなジャンルの人間がいる。いかにもパソコンオタクそうな男や、インテリ風のスーツ姿の男、ヘヴィメタルが好きそうな奴までいる。

つかさの目が大きく開かれた。探していた人物を見つけたのか？

違った。

つかさの視線の先にあつたのは特價商品の現品限りのメモリだった。

あからさまに素早い手つきでつかさはメモリの箱を手にしていった。ふと、つかさが横を見ると、同じ学校の制服を来た生徒がにやけていた。知らない生徒だが、つかさは無理やり何くわぬ顔をして、素早い脚でレジに向かい会計を済ませた。

そして、逃げるようにして店内を出た。

あの店には探していた影はいなかった……. . . . .と思う。

つかさそのままその足で三階の漫画喫茶に向かった。あの影は漫画など読みそうにないような気がする。けれど、漫画喫茶には別の物もある。

店に入つてすぐの場所からでは店内の客は見えなかった。

仕方なくつかさは漫画喫茶を利用することにした。

探している影がオープンスペースにいればいいが、個室にいたら探すのは難しいかもしれない。

つかさは漫画棚には目もくれず、パソコンスペースを見て回った。

簡単な板で横のパソコン台と仕切っているスペースの横を通りかかったとき、凄まじい音と速さでキーを打つ音が聴こえた。すぐにその場所にいくと、ディスプレイの前に座って、キーボードを奏でている影の後姿あつた。

その席の番号を確認して、つかさは少し離れた場所のパソコンの前に着いた。

素早い手つきでつかさはパソコンを操作し、先ほど確認したパソコンに簡単なメッセージを送信した。

瑠流斗さんに仕事の依頼があります。

返事はすぐに返ってきた。

パスワードは？

仕事を依頼するときに必要な秘密の暗号だ。つかさはそれを知っていた。

666

これは単純な数字の羅列ではなく、魔を意味する言葉だ。

二〇分後に駅近くのラフィーナで待っている。

という送信が相手からあり、つかさは返事を返そうとメッセージを送信したが、相手へのメッセージ送信が制限され、音信不通になってしまった。

仕方なくつかさはレジで会計を済ませて店を出ることにした。

ラフィーナの場所は“自分のパソコン”で調べた。店は飲食

店 BAR だった。

さすがに制服姿で入るのはマズイだろうと思い、つかさは店に下りる階段の前で相手を待った。相手が自分よりも後に来ることは漫画喫茶を出るときに確認済みだ。

指定の時間きっかりに影は姿を見せた。

全開にされたシャツから覗く十字の刺青。間違いなく瑠流斗だ。

店に入っでいこうとする瑠流斗の腕をつかさが掴んだ。

「ちよつと待つて」

「援交ならお断りだよ」

こんな言葉を言われて、思わずつかさは言葉を詰まらせた。

「……ち、違っし！ ウチが依頼人」

「キミがかい？」

瑠流斗は不審そうな眼でつかさを見ている。

「真正正銘ウチが依頼人。制服姿のままじゃお店に入れないからここで待つてたの」

「それはすまないね、依頼人が女子高生だとは思わなかったから。場所を替えようか」

歩き出した瑠流斗は地下には降りず、ビルの上を指して階段を上がりはじめた。どこに向かうのかと付いていくと、屋上に通じるドアまで来た。

ドアノブごと鍵を壊した瑠流斗が先に出た。

屋上は冷たい風が吹いていた。

この時期は日が暮れるのが早く、薄闇が空を覆おうとしていく。

「誰を殺して欲しいんだい？」

単刀直入に瑠流斗はつかさに尋ねた。

「あつと、暗殺の依頼じゃないけどオツケー？」

瑠流斗は殺し屋だった。

「内容にもよるね」

「プロなのに意外に柔軟なんだ」

「時代が時代だからね」

「なら今日マドウ区の工事現場に機動警察が出動した事件について教えて」

「同業者かな？」

「近からず遠からずじゃダメ？」

瑠流斗は少し考え込んでから口を開いた。

「いいよ、教えてあげる」

それは甘く囁くような声だった。

屋上の風を浴びながら瑠流斗が尋ねる。

「事件のなにが知りたいんだい？」

「あの女は何者なの？」

「朱の一族のひとり。レムリア家の三女、メルフィーナ・レムリア」

「朱の一族？」

「強靱な生命力を持ち、血を糧とする一族のひとつ」

想像していた以上の情報を持っている。瑠流斗が持っている情報のソースはどこなのか、彼の依頼人だろうか？

しかし、プロとして易々と依頼人から得た情報を他人に教えるだろうか。

「それってウソじゃないの？」

と、つかさが疑うのも当然だった。

「なぜに？」

「だって仕事の話は赤の他人のウチにするなんて、まあ教えて



「って頼んだのはウチだけど、そんな簡単に教えてくれるなんて思ってたし」

瑠流斗は微笑した。

「その答えは簡単さ。仕事じゃないから」

「はあ？」

「彼らに個人的な用がある。その辺りは詮索しなくてもいい」

疑問のキーワードにつかさはすぐさま反応した。

「彼ら？」

彼女ではなく、彼。単数ではなく複数。

「そう彼ら。レムリア家。特に当主といさかいがあってね」

メルフィーナひとりでも厄介だというのに、似たような存在が複数いることになる。

ただ今は表に姿を現しているのはメルフィーナだけである。

メルフィーナが復讐を遂げようとしている相手は蘭魔。過去になんらかの因縁があったと思われる。

過去にも似たような事件があったらしいが、愁斗が事前に調べたところによると、二五年近く前の出来事だった。そのときに蘭魔とメルフィーナの因縁が生まれたのか、詳しい情報までは調べられなかった。

つかさの前にいる瑠流斗という男は、二五年前の情報を握っているか？

「二五年ほど前にもメルフィーナが帝都で事件を起こしたらしいけど、そのあたりについて知ってる？」

「そのときの事件にボクは関わってない」

瑠流斗は言葉を続ける。

「けどね、生命科学研究所には少しだけデータが残っていたよ」

「ちよつ、ちよつとまさか……」

解けないと思われた方程式が解けたような驚き。

瑠流斗という男はハツカー“ルシフェル”とコネクションがある。

違う。

つかさは直感した。

「あなたが伝説のハツカー“ルシフェル”？」

瑠流斗は含み笑いを浮かべるだけで、黙して語らなかった。

それをイエスと取るかが問題だ。

口を閉ざす瑠流斗につかさは話題を戻して質問する。

「生命科学研究所のデータってなんなの？」

「当時ウィルスに感染して、唯一発病しなかったドナーがいたらしい。帝都病院で精密検査を受けたときのデータがあの研究所に残っていたよ」

帝都病院と生命科学研究所は提携している。どちらの親会社も秋影コーポレーションだ。

「情報はそれだけしかないの？」

つかさは少し不服そう顔をした。生命科学研究所には、多くの重要な情報があると思っただけに、肩透かしを食らった気分だ。

だが、ここから続く瑠流斗の話が本題だった。

「あまりにも過去の事件のデータが残っていないことを疑問に思わないのかい？」

「たしかに……」

「理由はおそらくそのドナーが事件そのものを隠蔽しようとしたからに違いない」

「発病しなかったドナー？　もしかしてそのドナーって大物政治家とか？」

「大物には違いはないね。ボクも彼女と会って話をしたいんだけど、なかなか会うことができなくてね」

「いつたい誰？」

「姫野グループ会長、姫野ユウカ」

灯台下暗しとはまさにこのことだった。姫野ユウカは姫野亜季菜の姉だ。すぐ近くに情報を持っている人物がいたのだ。

そうとわかれば迅速に次の行動に移らなくてはならない。つかさはここで話を切り上げることにした。

「ありがとう、情報料はどこに振り込めばいい？」

「個人的な雑談だから料金はいらさないよ。代わりにボクの質問に答えて欲しい」

「なに？」

「紫苑と同じ匂いをするのはなぜだい？」

「ノーコメントで」

にこやかな顔をしながらも、つかさの瞳は獲物を狩る獣の眼をしていた。構わず瑠流斗はつかさに背を向けた。

「キミとここで争う気はないよ」

瑠流斗は屋上のフェンスを飛び越えた。

急いでつかさはピルの真下を眺めたが、瑠流斗の姿はどこにもない。すでに街の影に消えてしまったあとだった。

瑠流斗はつかさと紫苑の関連性を知っていて、あえてつかさに話をしたのだろうか？

真意のつかめない瑠流斗の行動に、つかさは天を仰いだ。

このとき、同時に愁斗も自室で天井を仰いでいた。

伊瀬が運転するレンタカーは帝都の中心都市ミヤ区に向かっていた。

後部座席に乗っているのは亜季菜と愁斗。愁斗がマンションの外に出るのは、何日ぶりだっただろうか？

ミヤ区は帝都の中枢。夢殿と呼ばれる敷地内には、女帝直属の部下ワルキューレが住むヴァルハラ宮殿などがあり、帝都でもっとも警戒が厳重な場所のひとつだ。

高級住宅街を抜けた車はある玄関門の前で停車した。

カメラアイが車をスキャンして、重く閉ざされていた門が開く。

門の先から伸びる長い道が二階建ての洋館まで続いている。

レンタカーよりも高級車のほうが似合いそうな館だが、高級車ではなくレンタカーを使うのは、亜季菜の身を保身するためだ。高級車に乗るのは、ここに金持ちがいますと強盗に狙ってくれといっているのと同じだ。犯罪都市の一面もある帝都では、

よほどの防護策がない限り危険な行為だ。

洋館の中で出迎えた老紳士の執事は、三人を応接室に案内した。<sup>パトラー</sup>

外観は伝統的なゴシック建築の洋館だが、中は近代的な機会が配備され、エスカレーターやエレベーターの配備までしてある。

応接室の自動ドアが開かれ、その先で待ち受けていたのはこの屋敷の主、姫野グループの会長であり、姫野亜季菜の姉である姫野ユウカだった。

姫野ユウカは電動車椅子の上で三人を出迎えた。

「アンタね、突然来るとか言われても困るワケ」

最初の挨拶からユウカの不機嫌そうだった。もちろん、その言葉は妹の亜季菜に向けられた言葉だ。

「忙しいとかいって、今日も誰かとデートダイナーなんですよ」

二人の姉妹を見て愁斗は伊瀬にそつと耳打ちをする。

「二人は仲が悪いんですか？」

愁斗の問いに伊瀬は難しい顔をするだけで、なにも答えようとしなかった。

車椅子を走らせユウカは亜季菜を見上げた。

「デートのなにが悪いワケ？ デートも仕事のうちなのよ」

「デートもいいけど、早く結婚してくれない？ お姉ちゃんが先に結婚してくれないとアタシお嫁に行けなくない」

「アタシに結婚して欲しいならデートの邪魔しないでくれる？

今日だってアンタのせいで九音寺重工の社長との約束キャンセルしてあげたんだから」

このままだと不毛な言い争いがいつまでも続きそうだ。それを止めたのはバトラーと伊瀬が同時にした咳払いだった。

これで先に引いたのは年上のユウカだった。

「お見苦しいところを見せてごめんなさい」

切り替えも早く、ユウカは愁斗と伊瀬に微笑みかけた。かなり訓練された営業用の笑みだ。

が、その笑みも一瞬で、ユウカは上目遣いで亜季菜をカツと睨みつけた。

「アンタはさっさと出てって、アタシは愁斗クンと二人で話したいの」

「はあ、なんで？ 襲う気？」

「バカじゃないの、アタシは年上好きな」

「お姉ちゃんより年上っておじいちゃんじゃないの」

「又ツコロスわよアンタ」

再びはじまった戦いに伊瀬が咳払いをした。

「亜季菜様、行きますよ」

無理やり伊瀬に腕を引っ張られ亜季菜は部屋の外に出された。すぐにバトラーがドアを閉め、残されたのは愁斗とユウカだけ。

ユウカは営業用ではない笑みを浮かべて、ソファに座るよう愁斗に促した。

向き合う二人はしばらくの間、会話がなかった。

愁斗はユウカのことを歳の離れた姉だと亜季菜に聞いていた

が、外見的にはそんなことはない。二〇代後半に見えるが、実際は四〇近いという。

じつと愁斗を見入っていたユウカが口を開く。

「はじめまして、秋葉愁斗くん」

「はい、はじめまして。ユウカさんのことは亜季菜さんからいろいろ聞いています」

「どうせ悪口ばかりでしょう」

「そうですね……」

ここで会話は止まり、ユウカは再び愁斗の顔をじつと見入っている。愁斗は少し会話ベタなところがありそうだが、ユウカはそう見えない。けれどユウカは黙ってしまっている。

「僕の顔がなにか？」

と、愁斗が訊くとユウカは微笑んだ。

「初恋のひとにソツクリなのよね」

「初恋のひとですか？」

困った顔をする愁斗。

「蘭魔くんっていうのよね」

その言葉に愁斗は驚愕した。

「まさかッ!？」

「アナタのお父様らしいわね。こんな大きな子がいるだなんて、イヤねアタシも歳を取ったものだわ」

「父を知ってるんですか、なぜ、どこで!？」

「同級生だったのよ。クローバー同盟という探偵団を結成して、いろいろな怪奇事件を解決したのよ。あの頃が人生で一番有意

義だったわ」

「こんな話、初耳だった。そういえば、愁斗は父　蘭魔の昔話を聞いたことがない。どんな学生時代を送り、どんな青春時代を過ごしたのか、なにひとつ聴かずに育てられた。」

ユウカは車椅子を走らせ、愁斗に背を向けた。

「思い話はまた今度にしようかしらね。アナタが来た理由は大よそ聴いているわ。来なさい」

自動ドアを抜けて走り出す車椅子を愁斗が追う。

赤絨毯の敷かれた長い廊下を進む。

エレベーターに乗り込んだユウカが操作パネルの下のフタを開け、カードキーを差し込むと、ないはずの地下へとエレベーターは下りはじめた。

地下で愁斗たちを待ち受けていたのは大金庫の大きな扉。

静脈と瞳の虹彩の生体認証を済ませ、円形の分厚い扉が開かれた。

貸し金庫のように壁に並べられたケースから、ユウカはなにかを探しているようだった。

「どこに閉まったか忘れたわ。ちょっとバトラーを呼んできてくれないかしら……あつ、あつたわ、きつとコレね」

ユウカから手渡された銀色のケースを愁斗はゆっくりと開けた。

中に入っていたのは心臓だった。

模型ではない。

ガラスケースに入った心臓は鼓動を打っている。この心臓は



生きているのだ。

「誰の心臓ですか？」

生きた心臓を見てもまったく動じず、愁斗は淡々とユウカに尋ねた。

「メルフィーナ・レムリアよ」

「なぜ、こんな物があるんですか？」

「話せば長くなるけれど、話さなきゃダメかしら？」

「ぜひお願いします」

「めんどくさいわね」

ため息をつけてユウカは過去の話をはじめた。

遡ること二五年ほど前、当時中学生だった姫野ユウカは秋葉蘭魔らと、少年少女探偵団を発足した。それがクローバー同盟だ。

クローバー同盟はいくつもの怪奇事件を解決した。その中のひとつに朱の一族との戦いがあったのだ。

しかし、メルフィーナを滅ぼすことは、どんな手を使っても不可能だった。切り刻んでも、焼き払っても、何度でもメルフィーナは蘇った。

そこで苦心の末に倒すことを諦め、復活を遅らせるという臨時処置をしたのだ。

あれから約二五年の間、メルフィーナの脅威は影を潜めた。

しかし、蘇ったのだ。

メルフィーナは復讐のために蘇った。

「けれども完全体とは言えないわ、この心臓があの子の手に戻

らない限りは」

と、ユウカは話の最後に付け加えた。

「この心臓を取り返しに来る可能性はありますね」

「だからアナタに預かって欲しいワケ。ウチのセキュリティは万全だけれど、あの怪物と殺り合うなんて採算が合わないわ」

「わかりました僕が預かります、父に代わって」

「そうよね、蘭魔クンがいれば彼に任せるんだけれど、どこ行っちゃったのかしらね、彼」

「やはりユウカさんも知りませんか……」

もう一〇年近く愁斗は父の顔を見ていない。どこでなにをしているのか、それすらわからない。最後に父の顔を見たのは、魔導結社D Cの施設である“白い家”を逃げ出したときだ。

その数年後、ホームレス生活をしていた愁斗が亜季菜に拾われたのは、偶然ではなく運命の必然だったかもしれない。

今、こうして愁斗とユウカは出逢った。

メルフィーナとの戦いも因果運命なのかもしれない。

ユウカの車椅子に取り付けられている無線機が着信音を鳴らした。

通話ボタンを押すとスピーカーから聞こえてくるバトラーの  
声。

《何者かが屋敷の敷地内に侵入しました》

「映像頂戴」

《畏まりました》

車椅子に付属されたノートパソコンが全自動で開かれ、ディスプレイに防犯カメラの映像が映し出された。

映し出された軍勢の影は見間違えようがない。

愁斗よりも早くユウカが驚きの声をあげる。

「メルフィーナ！」

「遅かったようですね。彼女はここに心臓を取りに来た」

愁斗よ、いかにメルフィーナを向かえ討つ！

庭の底からスプリングラーのように突き出たビーム照射機

発射されるビームを浴びて爆発を起こす偽妖女たち。

攻めてはいるが、すぐに傷を再生させる相手には、些細な足

止めにしかならない。

ノートパソコンを覗きながらユウカは苦い顔をする。

「屋敷の中に攻め込まれるのも時間の問題だわね。Mフィールドを発動させたいのだけれど、いいかしら？」

「僕が外に出るまで待ってください。あとまだしばらくの間、これを預かっていてください」

メルフィーナの心臓をユウカに手渡し、愁斗は急いで屋敷の外に向かった。

玄関ホールで愁斗は伊瀬に呼び止められた。

「愁斗さん、通信機です」

伊瀬の投げたイヤホン型通信機を受け取り愁斗は外に出た。

玄関を出たすぐそこに偽妖女たちが迫っていた。その数は両手では納まりきれない。二〇、三〇と次から次へと湧いてくる

ようである。遠くにいる影は月夜の晩では見通せない。

愁斗が玄関を出てすぐ、屋敷全体は蒼白い防護フィールドに包まれた。魔導式のエネルギーフィールドだ。

迫り来る偽妖女を愁斗の妖系が断ち割る。

脳を割られた妖女は肉塊と化す。偽者の証拠だ。

愁斗の耳に声が響いた。

《愁斗さん……聴こえ……ますか？》

伊瀬の声だ。

「Mフィールドの影響で、少し電波状況が悪いようですね」

《周波数を強くしました。クリアに聴こえるようになりましたか？》

「はい、問題なく聞こえます」

受け答えながら愁斗は偽妖女の攻撃を躲し、鮮やかな手つきで煌きを放つ。

その動きを映すカメラアイ。

《引きこもりなのに、よく動けるわね愁斗くん》

伊瀬とは違う声が通信機から聴こえた。亜季菜の声だった。

「亜季菜さんは少し静かにしてください」

言葉に棘を含み、愁斗は黙々と敵を八つ裂きにしていく。

一体を狩りながら、眼は別の妖女を探している。

この中のどれかに本物がいる。

本物プレッシャーを感じるが、偽者に混ざりすぎて見分けがつかない。

視線を動かす愁斗の耳にユウカからの通信が入る。

《機動警察が乗り込んでくるそうよ、なにが有事立法よウザいわね》

「邪魔です、僕の姿も見られたくない。どうにかありませんか？」

《するわよ、アタシだって自分ちで機動警察に暴れられたくないもの》

機動警察に圧力をかけられる民間人は数少ない。ユウナは数少ないひとりなのだ。

続けて伊瀬の声が割り込んできた。

《機動警察ではなく別の侵入者が敷地内に……植物園がある方向です》

「植物園？」

《正面門を上とすると、左下、屋敷の裏手です》

「徒歩では遠いですか？」

《遠いですね》

「なら相手がここに来るまで待ちましょう」

最初のうちはバラバラに散らばっていた偽妖女たちだが、いつの間にか一箇所に終結しようとしているのが窺えた。みな、愁斗の元へ集まってきているのだ。新たな侵入者が同じように来る可能性は高い。

愁斗の手が急に止まった。

「可笑しい」

止まったのは愁斗だけではなかった。

偽妖女たちも動きを止めている。動いていたのは 本物だ

けた。

「心の臓が鼓動を打ちて呼んでおる。やはり汝が持つておったのじゃな蘭魔！」

メルフィーナが睨みつけた視線の先にいた者は、

「残念ながら僕は蘭魔じゃない」

愁斗だった。

偽者たちが枯れはじめる。

灰と化して地に積もる。だが、そのまま地に還ることはなかった。

メルフィーナの躰から細枝のような部位がいくつも伸び、地に刺さると養分を吸いはじめたのだ。

敵は前にいる。

しかし、愁斗は下から来ると感じた。

幹が意志を持ったように地面から突き出し愁斗を串刺しにせんとする！

メルフィーナの躰から伸びた部位だ。

飛び退き躲した愁斗は地面からの刺客に妖系を払おうとしたが、手を止めて本体に向かつて妖系を放った。

地面との接合部を切られたメルフィーナはニヤリとした。

すでに積もった灰は消えていた。それだけではない、芝まで枯れてしまっている。辺りの精を吸い尽くしたのだ。

枯渴した大地が自然に元に戻ることはないだろう。新しい土を入れるしかない。

「生を喰い尽す悪魔か……」

呟く愁斗の耳に大声が流れ込んだ。

《愁斗さん後ろ！》

伊瀬の声に反応して後ろを見ると、そこには蒼白い顔に浮かぶ紅い唇があった。

「朱の一族は禁忌を犯した。故に放逐されなければならないんだ」

影よりも密やかに瑠流斗がいた。

そして、銃声が鳴った。

その音はおぞましい。

幼女が泣き叫び、男が吼え、老婆が嗤う。

怨霊たちが蠢き、闇を形成する。

リボルバーから発射された怨霊呪弾はメルフィーナの肉を喰らうはずだった。

「外してしまったね」

呟く瑠流斗の視線の先にメルフィーナの姿はない。

愁斗も消える瞬間を見ていた。

「地に潜ったようだけど……そのことより僕まで殺す気ですか？」

「キミが延長線上にいたのだから仕方ないさ」

瑠流斗の放った呪弾は愁斗の目の前で放たれた。呪弾は口径よりも大きな渦を巻いて飛ぶために、弾の中心から三〇から一〇〇センチは危険範囲になる。そこに入れば怨霊に吞まれ手しまう。

瑠流斗は地面に開いた穴を覗きながら、関係のない話を愁斗

に投げかけてきた。

「キミ、僕が今日あつた二人に似てるね……匂いが」

「……………」

愁斗は黙した。

静かな夜だ。

先ほどの戦いが嘘だったように辺りは静まり返っていた。

その静寂はこの場ではなく、別の場から破られた。愁斗の耳に届く焦りの声。

《愁斗さん、奴が屋敷の中に侵入しました》

伊瀬の声と共に走る音が聴こえる。

「Mフィールドを解除してください」

返事は返ってこなかったが、Mフィールドは解除され、屋敷への道が開かれた。

駆け出す愁斗の背中に、穏やかに瑠流斗が投げかける。

「ボクが何者かとなぜ尋ねないんだい？」

「あなたの名前は知っています」

「……なるほどね」

艶やかに笑う瑠流斗。

愁斗は内心では焦ったが、それを表情に出すことはなかった。仮面を被ったように無表情のまま無言でいた。

突然、現れた瑠流斗に対して愁斗はなにも尋ねなかった。それは二度も会っているからだ。相手が何者で、メルフィーナを追っていることも知っていた。

瑠流斗がどこまで勘付いているかわからないが、紫苑、つか



さ、愁斗に関連性があることは気付いているだろう。

屋敷の中に入れたのはいいが、メルフィーナがどこにいるのかわからない。

「メルフィーナの心臓はどこですか？」

通信機で愁斗は尋ねたが、返事は返ってこなかった。

しかし、通信が切れている様子はない。微かに息遣いが聴こえるのだ。しゃべれない状況と考えたほうがいいかもしれない。

《そこかッ！》

通信機から聴こえたのはメルフィーナの怒号。

続いて、

《わっ！》

《ユウナ様お逃げ》

《お姉ちゃ》

《向こうへ！》

多くの声が混在した。

《愁斗クン、二階よ！》

最後の声はユウナの声だった。

通信機だけに聴こえるその声を、なぜか瑠流斗も感知していた。

「二階だね」

玄関ロビーの大階段を上る瑠流斗の背中を愁斗が追う。

右の廊下から猛スピードで走ってくる車椅子の影。その後ろにはメルフィーナ。そのさらに後ろには複数の人影があった。

愁斗が声をあげる。

「ユウカさん心臓をこっちに！」

「えいッ！」

ユウカの投げた銀色のケースを取ったのは瑠流斗だった。

「ボクが預かるよ」

「アンタ誰！」

と、声をあげるユウカに瑠流斗は魔性の微笑を浮かべた。

「殺し屋です」

凄まじい形相でメルフィーナは瑠流斗に飛び掛かった。

瑠流斗の姿が自らの影に沈む。

沈んだ瑠流斗が這い出したのは愁斗の真後ろだった。

「戦いはキミに任せるよ。ボクはこれの処理をする」

逃げ出す瑠流斗を追おうとするメルフィーナの足止めを愁斗がする。

愁斗の放った輝線はメルフィーナの両足首を切断した。

バランスを崩して床に這いつくばるメルフィーナは、そのまま腕の力だけでジャンプをして瑠流斗の背後に飛び掛かる。

それを遮ったのは屋敷に仕えるメイドが撃った捕獲ネットだった。

「ナイスよ椿ちゃん！」

ユウカが歓喜の声をあげた。

この隙に瑠流斗が玄関を出て行くこうとする。

得体の知れない男に心臓を持っていかれるわけにはいかず、ユウカが車椅子を走らせる。

エスカレーターなど使っている時間もなく、横幅の広い大階

段を身体を上下させ車椅子で駆け下りた。

「待ちなさいアナタ！」

一人で先走るユウカの後を追ってバトラーと数人のメイドが玄関を出て行った。

二階の踊り場に残された四人。

愁斗、亜季菜、伊瀬、そしてネットに捕獲されたメルフィーナ。

「おのれ、小癩な網じゃ！」

憎々しく発し、メルフィーナは網を切り裂こうとしたが、まったく歯が立たない。

伊瀬は眼鏡を直しながら網を見ていた。

「帝都の蜘蛛が吐き出す糸を寄り合わせて作られた糸ですね。

これはその蜘蛛が吐き出す溶解液でしか溶かせません」

「ならこのまま研究所に直行ね」

そう告げる亜季菜に愁斗は不服そうな目をした。けれど、口にはしなかった。

溜流斗を追う車椅子は自動車並みのスピードを出せる代物だ。

なのに追いつけない。

「アイツ人間じゃないワケ？」

もうすぐ溜流斗は敷地の外に出そうだ。

敷地の外にはすでに機動警察が包囲している。偽妖女が一步でも外に出れば射撃の的になるだろう。彼等に溜流斗の捕獲も任せるか？

ユウカはケータイを手にとつて、一瞬で考えを改めた。

今から上に電話をしても、下に伝わるまでに時間がかかる。外にいる機動警察は思うように動いてくれないだろう。

前方で瑠流斗が足を止めていた。

嫌な音が聴こえた。怨霊銃弾が発射されていた。

瑠流斗の前に立ちはだかつている偽妖女。まだ残っていたのだ。

偽妖女を葬り立ち尽くす瑠流斗にユウカが追いついた。

「それ返しなさい」

「ボクが責任を持って処理をする。それではダメかい？」

「他人のアナタに任せられるわけがないでしょ。それは誰にも処理できないわ」

すでに試した。

切り刻んでも、焼いても、溶解液につけても、心臓は心臓の形を保ち、鼓動を打ち続けたのだ。そのため、仕方がなく屋敷の地下金庫に安置されることになった。

心臓からメルフィーナの形が復元されないことから、心臓は独立した器官であることが窺える。それと共にエネルギーの源であることが、過去の戦いでわかっていった。

「ボクのほうがキミたちよりも、彼女たち一族について詳しいと思うよ」

「アナタなら処理できるってワケ？」

「方法はあるよ」

「“できる”とは言わないのね」

方法はある。その言葉には続きがありそうな言い草だ。接続詞の“は”がなにを訴えている。

「鋭いねキミ」

「方法はあるけれど、なに？」

「失敗の可能性もあるってことさ」

「どんな方法よ？」

「あまり人前ではやりたくないね」

「ハア？」

ユウカは目を丸くして口をあんぐり開けた。

いったいどんな方法なのだろうか？

溜流斗が耳をそばだて辺りを見回した。

「音がする……地の底だ」

ユウカには聴こえなかった。

理由は遠く離れていたせいだ。

地に亀裂が走り、地の底から轟音と共に這い出た太い幹。

何本もの枝は天に向かって折れ曲がりながら伸び、枝の先辺りに紅い蕾が芽を出した。

蕾の先が小さく開くと、一瞬にして甘い香が辺りに漂い、むせ返るほどのなにもかかわらず、それはヒトを魅了する魔性の香だった。

その木は屋敷玄関のすぐ近くに生えていたが、遠くにいるユウカにもその蕾が見えた。理由はその蕾が二メートル近くもあることと、その蕾が淡く輝いていたためだ。

夜闇で輝くその蕾は、なんらかのエネルギーを持っているよ

うに思えた。

瑠流斗の眼を細めて木の動向を眺めていた。

「不味いことになったね。栄養を蓄えたセルフィーナは木になった」

「ハア？」

「次は花が咲き、子が生まれる」

「だって本体は屋敷の中に……」

「あれは抜け殻だったんだ。本物は地中にいた……そして、根はボクら真下にも」

地中から突き出した尖った根の先が瑠流斗に襲い掛かる。

ジャンプというより、天に飛翔するように舞い上がった瑠流

斗は地を見た。

夜目が冴える瑠流斗の瞳には大地が枯れていくのが見えた。

さらに自分に魔の手を伸ばす根が見え、瑠流斗は空中で身を翻すも、空中では体勢を変えるのが精一杯で、一本、二本で済まなかつた根を避けきるのは不可能だった。

狙いはわかつている。瑠流斗が抱えている銀色のケースだ。

「キミに一時的に任せる！」

瑠流斗の手から投げられた銀色のケースをユウカが受け取った。

「この状況でアタシに」

ユウカの表情が凍りついた。

空中で串刺しにされた瑠流斗の姿が眼に焼きついた。

腹を貫いた根を伝い落ちる鮮血。

瑠流斗はユウカに向かって微笑みかけた。

「痛いけど死にはしない、早く逃げないとキミのほう死ぬよ」

瑠流斗の言葉どおり、根は次の標的をユウカに定めていた。

根は槍のようにユウカを串刺しにしようとす。

瑠流斗はその姿を見ながらも、助けに助けられない状況だった。腹を突き貫かれ、手足には根が錠のように巻きついてしまっている。

ユウカに出来ることはひたすら逃げることだった。

電動車椅子の最大出力を出し、固定されているシートベルトと脚が軋む。

ドリフトしたタイヤが枯れ土を舞い上げる。

逃げるとしたら公道。つまりが屋敷の外だった。館の前には木の本体があり、引き返すわけにもいかず、正面門ならば運良く近くにある。

外には機動警察が待機している。

正面門が迫ってきたとき、ユウカは車椅子についたりモコンで門を開けようとした。

だが、開かない。

「サイテーだわね」

しかし、策がないわけではない。

車椅子に仕掛けられていたギミックが作動し、側面から出たビーム照射機が門に向かって放たれた。

爆発音と共に門の周りに煙が蔓延した。

軽く咳き込むユウカが見たものは、無傷の正面門だった。

「さすがウチの門だね。丈夫に作りすぎよ」

後ろや地中からは根が迫っていた。同じ場所に留まっている暇はない。

「この機能使ったことがないけれど大丈夫かしらね？」

一か八かの賭けだった。

車椅子についた緊急脱出ボタンを叩き押した次の瞬間、ユウカの身体は花火のように宙に飛ばされていた。

「まさかこの機能を使う日が来るなんて思ってもみなかったわ」

パラシュートを開きゆっくりと降下するユウカの身体は、屋敷の外に止めてあった戦闘車両の上に落ちていった。

そして、ユウカはある重大なことに気付くのだった。

「あらん？ な、ない!？」

怪異は愁斗たちの目の前で起きた。

捕獲ネットに絡まっていたメルフィーナが枯れていく。

水分が抜かれ、老婆のように骨と皮になり、やがてひびが入り灰と化した。

「まさか偽者のはずが……」

静かな驚きを口にした愁斗が窓に向かって走り出した。

二階の窓から正面に見える巨木。

無言で立ち尽くす愁斗の横に亜季菜が駆け寄ってきた。

「なにアレ？」



紅い蕾が花開こうとしていた。

淡く輝き艶やかに濡れる花弁が開かれる。

甘い甘い匂いは閉まった窓のこちら側にまで香立ち、愁斗の横で伊瀬と亜季菜が微かな立ちくらみを覚えた。

亜季菜の肩を支える伊瀬に向かって愁斗が託す。

「亜季菜さんを頼みます」

あの木がいつたいたいなんのかわからないが、蕾が開いて良いこと起きそうもない。現に窓越し魔気を浴びた二人が、微かな影響を受けてしまった。

玄関を飛び出した愁斗は巨木を見上げた。

蕾の先から白い息が這い出される。

立ち込める甘い香りは胸焼けしそうだ。

蕾を落とすか、それとも木を倒すか。

愁斗の手が滑るように動くと、木の根元に紅い線が走った。

血だ、木がどろりとした血を流した。

血が流れた痕は瘤のように硬くなり、再生を遂げてしまっている。

放った妖系は向こう側まで達することはできなかった。

射抜くような殺気が愁斗に向けられた。

木の表面に空いた三つの穴がまるで目と口のように動き出した。

「蘭魔……蘭魔……」

女の怨めしい声が愁斗の耳に張り付いた。

「僕は蘭魔じゃないと言っただろ。耄碌しているのか……」

愁斗の目が蓄を見定めた。

元を絶てなくとも、蓄ならば絶てるか！

愁斗が妖糸を放とうとした刹那、枝が串刺しにしようと襲い掛かってきた。

「くっ……」

已む無く愁斗は防御に徹する。

襲い来る枝を斬りながら避ける。

だが、しょせん愁斗の肉体には限界がある。傀儡と違い、生身では運動能力に限界があり、肉体で躲かし、妖糸で攻に徹することができない。攻は防と一体となり、敵の攻撃を防ぐので精一杯だった。

雨のように降り注ぐ敵の攻撃に愁斗は苦戦を強いられた。

二本の手で複数の攻撃を相手にするには、敵の攻撃以上に素早く身をこなす必然がある。もしもその片手でも攻撃の手を緩めれば、愁斗の命は危険に晒される。

しかし、このままでは愁斗の体力が先に尽きる。

愁斗の放った輝線が敵を外れた。

躰を掠めた枝に愁斗のわき腹が血を噴いた。

ついに愁斗が集中力を切らしたのか？  
違った。

愁斗の斬った空間が唸り声をあげる。

裂かれた空間の傷は轟々と咽喉を鳴らしながら、周りの空気を吸い込み広がっていく。

どこを斬ってもよいというわけではない。正しい場所を斬ら

れなくては、空間は断ち切れず、たとえ切れたとしても間違った場所に繋がれば己の命も危ない。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

見分けに時間がかかったが、愁斗は正しい場所を切り繋いだ。「行け！」

裂かれた空間から 闇 が狂い叫びながら飛び出した。

闇 は夜闇に忍び、声だけが耳に届いた。

巨木の姿が消えていく。蛇のような 闇 に巻きつかれ、景色の夜に溶けていく。けれど目を凝らせば、やはりそこだけ没している。

夜の中にあつて、なお暗い闇色。

愁斗は見た。

紅い花が激しく輝いている。

「……しまった」

闇 が取り込まれる。木の表皮から 闇 が吸収されていく。

花が咲く。

早送りのように急速に花が開かれる。

闇 は糧となり、その成長を促進させてしまったのだ。

紅い花の雌しべはヒトの形をしていた。

華の中から生まれ出たものは、艶やかな裸体を晒す魔性の女

メルフィーナだった。

今までの偽者とは各が違う。

本物が生まれてしまった。

「ちよつとキミたち、助けてくれるとありがたいんだけど？」  
木の根に腹を刺され、天に突き上げられながら瑠流斗は平然としていた。

瑠流斗が見下ろす先にいるのは、ユウカを追ってきたバトラ  
ーとメイドだった。

「申し訳ございませんが、貴方様はご無事なようですので、主人を助けに参ります」

バトラーは無事と判断したが、腹を刺された姿は無事には見え  
ない。

会釈をして先を急ごうとするバトラーたちを瑠流斗が呼び止  
める。

「キミたちの主人なら、門の向こう側に無事脱出したよ、ボク  
は目が良くてね。ただね、彼女が持っていた銀のケースは門  
のこちら側に落ちている」

「ならば回収に急がねばなりません」

やはりバトラーたちは瑠流斗を置いて行ってしまった。

「薄情な人たちだ」

瑠流斗は腹を刺されているだけではない。手首足首も根に絡  
められている。

しかし、根はすでに動きを止めていた。

「養分を吸い上げる必要がなくなったというわけかな……それ  
は不味い」

メルフィーナの心臓が入ったケースはどうなった？

目の良い瑠流斗にも、地面に落ちた小さなケースまでは見えなかった。

「……………うっ」

腹の中でなにかが蠢いた。

再び動き出す木の根。

手も足も動かない状況で、瑠流斗は口を使った。

高音で吹かれる口笛の音色。

月光に照らされた瑠流斗の影が獣を模った。長い毛を揺らす四つ足の影。瑠流斗が自らの影に飼っている閻獸あじゅうだった。

低く咽喉を鳴らす閻獸が地面を蹴り上げ、瑠流斗を拘束する根を噛み切った。

黒血が根から飛び散る。

唇に跳ねた血を舐め取る瑠流斗。

「毒気が多い……………飲めたもんじゃないね」

閻獸の活躍で解放された瑠流斗は地面に降り立ったが、崩れるようにして膝をついてしまった。

「血が足りない……………」

瑠流斗の腹に空いた穴からはまだ血が流れている。それでも普通の人間に比べれば、すでに血の流れは治まりつつある。

貧血に視界を掠められながら、瑠流斗は襲い来る根を手で切り裂いていった。

瑠流斗に手に宿る閻の爪と、閻獸の牙が根を爆砕していく。巨大な花が開いてしまったことを、瑠流斗は直感的に感じて

いた。けれど、向かっているのは別の場所。巨木に背を向けてメルフィーナの心臓を目指していた。

瑠流斗がバトラーたちに追いつくと、彼等は背を丸めて地面を隈なく探していた。

頑丈そうな門の向こう側からはユウカの喚き声が聞こえる。

「まだ見つからないの！」

どうやら銀色のケースが紛失したらしい。

車椅子は横倒しになってすぐ近くに転がっている。

木の根もここまでは追ってきていないらしいが、ここは用済みだと考えたほうがいいかもしれない。心臓の在り処をもっとも感知できるのは持ち主だろう。

懐中電灯も持たないで、暗がりでも物を探するのは大変だ。

それを見つけたのは瑠流斗だった。

「穴が空いてるね。残念ながら心臓は持ち主の元へ」

地面には穴が空いていた。人が潜るには小さすぎ、ここから追うのは得策ではない。けれど二次元であれば追える。

「無理をしてはいけないよ」

闇獣が瑠流斗の影を離れ穴の中に潜っていった。

瑠流斗もそれを追う、地上から。

行き着くところはわかっている。分岐して伸びる根は一つのところで結びつく。巨大な木の種子が地の底で艶笑している。

腹の血は治まった。メルフィーナには及ばないが、ホモサピエンスに比べれば遥かに早い傷の治りだ。

夜道を飛翔するように駆けながら瑠流斗はボソボソ呟いてい

た。

「……血が足りない……血が足りない……」  
視界が徐々に閉ざされていく。見えるのは宙そらに浮かぶ紅い輝き。

木に近づくと踊る影が見えた。

紅い花から伸びたメルフィーナが愁斗と戦っている。

まだ熟していないのか、メルフィーナの脚は一本で繋がり、その脚は花の中心と繋がれたままだ。まるでへその緒に見える。

愁斗の妖系が花とメルフィーナの繋がりを断った。

地面に落ちたメルフィーナは一本だった脚が二本に分かれ、

地面の上に凜として立った。

愁斗も溜流斗も気がついた。

本体からの供給を失ったメルフィーナは老いている。皺一つなかった肌が枯れていく。

放たれる溜流斗の怨霊呪弾。

メルフィーナの頭部を吹き飛ばした。

残された下半身は空気が抜けたように干からび、老い朽ち果てた。

まだ生まれたばかりのメルフィーナは完全体ではないのだ。

メルフィーナは今の一体だけではない。

次々と襲い来る“雌しべ”を愁斗が落とす。そして、溜流斗が狩る。

花咲き乱れ、赤黒く染まる大地。

香り立つ鉄の臭いに溜流斗は頭が眩んだ。

「ちよつとキミ、ボク限界……」

貧血で瑠流斗は前のめりになって地面に伏した。残された愁斗もわき腹を押さえる指の間から血を滲ませている。表情は鋼のように無機質だが、奥歯には力が込められている。

花は全て落とした。それを確認してから瑠流斗も気を失ったのだらう。

しかし、木はまだ生きている。

新たな蕾が生まれようとしていた。

元を断たなければ意味がない。

愁斗の通信機にユウカから連絡が入った。

《愁斗くん、屋敷の中に非難してMフィールドを発動させて》

上空を見上げると戦闘ヘリがこちらに向かってきていた。

同じチャンネルに伊瀬の声が割り込んでくる。

《私がMフィールドを発動させます、愁斗さんは早く屋敷の中に非難をしてください》

「わかりました」

愁斗の視界に瑠流斗の姿が入った。

また枝が雨のように襲い来る中、瑠流斗を背負い愁斗は屋敷の中に避難した。

両サイドにミサイルを装備したヘリは旋回しながら巨木を見下ろした。

「ぶっ飛ばしてあげなさい！」



操縦者に向かってユウカが合図した瞬間、一撃目のミサイルが巨木に向かって発射された。

爆発に巻き込まれ木片と黒血が飛び散り、科学の炎によって巨木が燃え上がった。

怨念の聲が木霊する。

「許さぬぞ……許さぬぞ……」

炎は黒く染まり、女の聲がプロペラを回転させるヘリの中にまで響いた。

燃え揺れる炎を屋敷の窓から見ながら、愁斗は屋敷に残ったメイドに応急処置をもらっていた。

床には溜流斗も寝かされているが、こちらの処置はどうしていいかわからない。腹に穴が空いているのだ。普通ならば手術が必要である。

朦朧とした意識で溜流斗は愁斗に手を伸ばしていた。

「血をくれないか……傷から流れている分だけでいい……垂れ流すのはもつたいない……」

疑念に眉を顰める愁斗の顔を見て、溜流斗は言葉を続ける。

「血を吸ったガーゼでいい……」

紅く輝く溜流斗の眼は狂気を孕んでいた。

外では二撃目のミサイルが発射されていた。愁斗の目はすでに外に向けられていた。

焼きついて崩れ易くなっていた巨木は消し飛ばし、地面には巨大な穴が空いた。

吹き飛ばされた地面の底で眠っていた種子が目を覚ます。

そこに立つメルフィーナは、いつにも増して艶然と、愁斗の瞳と合わせて嗤った。

まだ終わっていない。

戦いに向かおうとした愁斗の視界に瑠流斗は入らなかった。いつの間にか瑠流斗は消えていた。

玄関を出た愁斗の前に立ちほだかるMフィールド。

「伊瀬さん、フィールドの解除をお願いします」

Mフィールドの消えた先で、妖女メルフィーナは愁斗を待ち構えていた。

「許さぬぞ……許さぬぞ……蘭魔！」

「……あなたは僕に倒されることによって、あの人の幻影に倒されるんだ」

「掛かって来い蘭魔、血祭りにあげてやるわ！」

全速力で駆ける愁斗の手から閃光が奔った。

伸ばされた妖女の手首が飛んだ。

しかし、手首など飛んでいないように、そこにある手でメルフィーナは妖系を掴み取ったのだ。

以前よりも再生のスピードが速くなっている。

メルフィーナに不可視に近い妖系を引っ張られ、愁斗は思わず足のバランスを崩した。

愁斗は地面に片手を付きながらも、残った手から妖系を繰り出す。

妖女の脚が飛ばされた。

しかし、脚は最初から二本のままだったように、そこには脚

があった。

愁斗の目はメルフィーナの不完全な美を見ていた。片方だけ  
ない腕。あれを斬ったのは愁斗の父。それも二五年ほど前のこ  
とだ。

「僕の業は中学生のあの人すら超えられないのか……」

地の底から音がした。

竹やりの罨のごとく地面から突き出た根が愁斗を襲う。

地面を横に転がりかろうじて攻撃を躲す愁斗。地面に付いた  
メルフィーナの足から根が伸びていたので。

襲い来る根を断ち切り、捨て身の覚悟で愁斗は妖糸を放つ。

先の尖った根が愁斗の太腿を貫いた。

それと同時にメルフィーナの胴体は、肩から腰にかけて斜め  
に落とされていた。

血の線を走らせながら、メルフィーナの上半身がずるりと滑  
り落ちた。

しかし、やはり愁斗の業はまだ及ばぬ。

傷口から伸びた触手のような襷紐ひたひもが二つの体を繋ぎ合わせた。

奥歯を噛みながら愁斗は太腿を刺した根を切り、根を抜かぬ  
まま後ろに後退りをした。

傷付き脚を封じられた愁斗の耳に通信が入った。

《愁斗クン、どうして召喚を使わないの！》

カメラアイ越しに愁斗の戦いを見守る亜季菜の声だった。

召喚 それは傀儡士の最高奥義。

傀儡召喚はそこにいながらにして、時間と空間を超越し、超

常的な力を持つ異界の住人をこの世に呼び寄せること。そして、それを 使役することができれば、あらゆる望みが叶えられると云われている。

「召喚は時と場所、僕の気持ちにも左右されます。今はできません」

愁斗はそう告げた。

たしかに召喚はいつでも自由にできるものではない。時と場所、地形や術者のフィーリングにも左右される。けれど、それは口実にすぎなかった。

愁斗は斬る気でいた。

なんとしても立ち塞がる壁を断ち斬らねばならなかった。

「もう逃げることもできぬか？」

メルフィーナは瑞々しい脚を伸ばしながら、一步一步と愁斗に近づいてくる。

「血を啜り、骨の髄まで喰らつてくれる」

自由の利かない片足で逃げるのは不可能に思える。逃げる気もなかった。

愁斗に漲る魔性の気。

闇に属する魔性のもの。

この一撃に愁斗は全神経を集中させた。

「視得たッ！」

渦巻く闇色を纏った妖系が世界を断つ。

渾身の一撃はメルフィーナの脳天から股間まで奔った。

「妾は何度斬られようと……ッ!？」

異変を直ちに察したのは斬られたメルフィーナだった。

血を噴出し躰は左右対称に崩れ落ちた。

口も咽喉も半分にも関わらず、メルフィーナは魂の底から叫び声をあげた。

「妾は死なぬ！」

メルフィーナの躰が枯れていく。

その光景は止まっていた時間が突如流れたように、美しさの欠片もなく、干からび老婆のように、そして散り逝く。

灰と化したメルフィーナだったものは、塵と化して夜風に吹かれて消えた。

愁斗は地面に仰向けに倒れた。その瞳に星の輝きは映らない。汚れた宙そらは星の輝きを隠し、代わりに地上では文化の光が煌々と輝いている。

屋敷の中から駆け出してくる足音は愁斗のすぐ傍で止まった。

「愁斗くん大丈夫！」

心配そうな顔をして自分を覗き込む亜季菜に愁斗は、

「これでまた引きこもり生活に戻りそうです」

と、皮肉を言った。

太腿からは血が滲み出している。当分の間、まともに歩くことができないだろう。

地上に降りたへりから、普通の車椅子に乗ったユウカが愁斗の元にやってきた。

「早く愁斗くんをへりに乗せなさい、病院に運ぶわよ」

愁斗から視線を上げたユウカの瞳に映る十字の刺青。

「アナタが持つてるのは……！」  
「箱だけさ」

そこには銀色のケースを持った瑠流斗が立っていた。開かれたシャツからは十字の刺青が覗いている。穴はなかった。

瑠流斗はケースを開けると、中に入っていた空のガラスケースを皆に見せ付けた。

メルフィーナの心臓は消えていた。

いつたはどこに消えたのか？

ユウカの視線に気付いたのが、瑠流斗は口元に付いていた血を舐め取って、この世のものとは思えない艶やかな笑みを浮かべた。

それが消えた心臓の真相なのだろう。

心臓を失ったメルフィーナは……。

では、果たして愁斗の業は父の幻影を断ち切ったのか？

それを語るものは誰もない。

いつしか瑠流斗の姿も消えていた。

復讐の朱（完）

くくつかん  
傀儡館

地獄。

そこはまさに地獄のごとき場所だった。

天は赤く燃え揺れ、ガス状の暗雲が流れ渦紋を巻く。

岩肌を剥き出しにした渴いた大地には、大きく口を開けて深奥まで続く亀裂が奔り、蜿蜒と続く遙か先には溶岩を噴き出す群山が眺めた。

足元から噴出した熱い蒸気を、少年は後ろに跳躍して躲した。少年の真後ろには、唐草を模した装飾の施された真鍮の扉があった。

しかし、そこには壁がない。扉だけがそこに存在していたのだ。

一見して意味を成さない扉のようであるが、そこを潜り抜ければその意味を知る。扉は別の空間へと旅人をいざなう。それを知る者たちは、ゲートと呼んでいた。

赤い空に木霊する遠雷に混じり、少年の耳には妖異たちの呻き声が聴こえていた。

瘤だらけの赤黒い巨躯を持つ悪鬼。

長い体毛を軀中に生やし、老婆のような顔を持った化け物。

四つ足の凶猛な野獣も多にいる。

少年に殺到する怪物の荒波。

群から飛び出し、巨大な怪鳥が少年の頭上に目掛けて滑空して来た。

鋭利な鉤爪を向ける怪鳥の前に、突如として立ちはだかった白い薄絹のドレス姿。

そして、怪鳥はドレス姿の影が放った煌きによって、顔面から左右に身を裂かれたのだった。

少年は女性に背中を預け、押し寄せてくる数え切れない怪物たちを凝視する。

二人に対して、猛敵の数は果てない。それを掃滅する術はただひとつ。鍵は少年が握っていた。

少年の黒瞳が、より深く闇を帯びた。

敏速に動いた少年の指先から、煌く輝線が放たれる。

その輝線は空に奇怪な紋様を描く 魔法陣だ。

少年が叫ぶ。

「傀儡士の召喚を観るがいい、そして恐怖しろ！」

魔法陣の“向こう側”から、巨大な魔獣のような それの

呻き声が鼓膜を震わせた。

それが豪快なくしゃみをする、唾の飛沫が荒れ狂う嵐を巻き起こし、嵐は霧の巨人を創りあげた。

この場でなによりも大きな霧の巨人は、霧に包まれた中でただ一つ蒼く輝く目玉で、三〇メートルの高みから周りの小物たちを見下ろした。

脅えだす怪物ども。

だが、もうしっぽを巻いても無駄だ。



霧が怪物どもを呑み込み、叫喚と共に霧が紅く染まった。

先の見えない霧の中で、聴覚が研ぎ澄まされ、怪物どもが次々と惨死していくのを知覚した。

霧の巨人は興奮するように真っ赤に染まり、周囲の怪物どもは瞬く間に掃滅されてしまった。

だが、まだ遠くで呻き声がある。

「……今日はここまで」

少年は呟いた。

豪雨が滝のように降りしきる闇夜の山道。

苛立つアヤは力いっぱいハンドルを両手で叩いた。

「クソッ！」

停止した車中から、闇を照らすヘッドライトを視線で追った。その瞳は憔悴しきっており、そのため実年齢の二四歳には見えないほど、顔も老人のようにやつれてしまっていた。

車がエンストした。

エンジンを掛け直そうにも、不気味な音を鳴らすだけで、それ以上はなにもアクションが起こらない。

屋根を打ち付ける大粒の雨音。

ヘッドライトは弱々しく闇に吸い込まれ心もとない。

町までの距離もわからず、世界にたったひとり取り残されてしまった気分だ。

「どうすればいいの、どうすればいいのよっ！」

狂乱してアヤは長い髪の毛を掻き乱す。

ケータイを手に握る　　が、圏外。それに、今は人を呼んで助けを求めるわけにもいかなかった。

車のトランクに積んである“モノ”が心配だ。人を呼んでトランクを開けられたら、いい訳もなにもできない。

山中を走る途中、何度もトランクから音が聴こえた。それがなんの音かはわからない。その度に、中の“モノ”が壁に当たる衝突音だと自分に言い聞かせてきたのだ。

ローヒールでアクセルを踏み潰すが、やはり車は前に進まない。

「イヤ、イヤ、イヤーツ！」

こんな場所にいたくない。気が狂いそうだ。

周りの闇が怖い？

違う。

別の“モノ”が怖い。

居ても立ってもいられず、アヤは運転席から後部座席に移動して、ウインドーから辺りのようすを伺おうとした。

水滴がついて曇るガラスを袖で拭き、アヤはその先に光るなにかに眼を凝らした。

もう一度、ガラスを擦って再確認をする。

明かりが見える。

希望が灯る。

すぐにアヤは助手席に移動して、ダッシュボードに入れてあった折り畳み傘を出そうとした。傘はなかった。前に使ったままで戻し忘れたのだ。

今日は厄日だ。アヤの苛立ちは募るばかりだった。

しかたなくアヤは車のキーを抜いて、豪雨の降る車外へ飛び出した。

雨が瞼に当たり視界を遮る。

アヤは眉の辺りに手を添え、雨を遮りながらあの明かりに向かって走り出した。

足元のジーンズに飛散する泥水。

雨に濡れて肌に張り付くアンダーシャツ。

出かける前に着替えたばかりなのについていない。

濡れる髪を振り乱しながら、走りついたアヤは明かりが洋館から漏れていたものだと思ふ。

助かったと思う反面、こんな山奥にある洋館を薄気味悪く思った。

人里を離れる主は変わり者が偏屈者だと、アヤは勝手な先入観を抱いた。

しかし、その先入観は少し裏切られる形になった。

玄関をノックしたアヤを出迎えたのは十四、五歳の少年だったからだ。

「私はこの屋敷の主に仕える使用人ですが、あなたの用はなにでしょうか？」

偏屈そうな中年か、老年が出てくるものだと思構えていただけに、アヤは面を喰らってしまったのだ。

深い黒瞳に見据えられ、アヤは慌てる。

「車がエンストして困ってるの！」

「なるほど……夜道と豪雨で外は危険です。今日はここにお泊まりなさい」

妙に落ち着いた相手の物腰に、アヤは一度冷静さを取り戻し、再び自分の状況に取り乱しそうになった。

「明日は会社に行かなくてはいけないの。だから車を貸していただけると嬉しいのだけれど……？」

車に残してきた“モノ”が気がかりだ。アレを別の場所に運ばなくてはならない。

「残念ながら明日は月に一度の買い出しに車を必要とします。だからあなたにお貸しすることはできない。朝一で買い出しに向かいますので、その際に侍女にあなたを送らせましょう」

翌日まであの場所に車を残してきて平気だろうか？

朝まであの道を人が通る心配はおそらくない。だからこそ人里を離れたこの場所を選んだのだ。洋館があつたのは予想外だった。

ひとまずはこの屋敷で時間を潰し、冷静になつてから今後の対策を練ろう。

アヤは少年の申し出を受けることにした。

「一晩泊めてもらうことにするわ。それから、できれば送ってもらうのは、昼頃に延ばせないかしら？」

車のトランクにはまだ“屍体”を乗せたままだ。

雨が止むか、明るくなったら、残してきた屍体をどうにかする。朝一で町まで送ってもらったら、車をあの場所に残しておくことになる。それから再び車をレンタルするなりして、あの

場所に戻るには時間がかかる。そんなリスクは負いたくなくなつた。

深く考えるように下を向いていた少年が顔を上げた。

「昼にという相談は、主人に聞いてみなければわかりません」

「わかつたわ」

俯いたアヤはすぐに顔を上げて手を叩いた。

「そうだ、あたしの名前は霜崎アヤ。ところであなたの名前は何？」

「愁斗と申します」

「年齢は？」

「一三歳になります」

それを聞いてアヤは少し驚いた。思っていたより、年齢が低かつたからだ。外見よりも、大人びた物腰が年齢を高く見せていたのかもしれない。

「一三歳というと中学生だろうか。だが、この場所から学校に通っているとは考えづらい。

「あなたはどこに住んでいるの？ この屋敷？」

「そうです。主人に仕える使用人ですから」

「学校は通っていないの？」

「僕は死人ですから」

と返され、アヤは理解に苦しんだ。

死人？

まさかそのままの意味ではないだろうが、どういう意味なのかアヤには理解できなかった。

「立ち話はこちらまでにしましょう。風邪をひくといけません」と、愁斗は言い、廊下の向こうに顔を向け大声をあげる。

「アリス、お客様を部屋に案内してくれ！」

呼びつけられ姿を見せたのは、メイド服を着たブロンドの少女だった。年齢は愁斗よりも明らかに低い、七、八歳くらいだろうか。しかし、この少女も妙に物腰が落ち着いている。

やって来た少女を愁斗が紹介する。

「侍女のアリスです。この者があなたを部屋にお連れします」

紹介されて、蒼い目を細めてニツコリと笑うアリス。肌は透き通るように白く、毛穴も染みもなく、創られたような端正な顔立ちをしていた。

ややアヤは困惑した。

「この子は日本語がしゃべれるの？ “次女” だと言ったけど、あなたには似ていないわ」

勘違いしたアヤは軽率に似ていない兄弟だと指摘した。すると、アリスは子供とは思えない艶笑を浮かべ、流暢な日本語を話した。

「“次女”ではなく、メイドという意味の“侍女”でございます」

アリスは宙に指で二つの漢字を書き比べた。日本語だけでなく漢字も精通しているらしい。

外観から感じていたが、この洋館は少し可笑しな感じがする。日本人の子供と外国人の子供が、この屋敷の主に仕えている。まだ見ぬ屋敷の主に、アヤは不気味さを感じずにいられなかつ

た。

アリスは手を廊下の先に差し向けた。

「お部屋にご案内いたします。どうぞこちらへ」

歩き出すアリスのあとを、アヤは周囲を見回しながらついていく。

屋敷の中は外観と同様、西洋風の造りになっていた。長く伸びる廊下には刺繍の施された絨毯が敷かれ、壁には風景や人物を描いた絵画が飾られている。資産家ということは安易に想像できた。

ゲストルームに案内されたアヤはアリスにシャワーを勧められた。

「シャワーを浴びて、お着替えをなされた方が宜しいかと思えます」

その言葉とタイミングを見計らっていたように、愁斗が服を抱えて部屋に入ってきた。

「生憎ドレスしかないが、これを着替えに使ってください」

ドレスを手渡され、アヤはそのドレスに疑問を抱く。

「誰の物？」

愁斗が答える。

「この屋敷の主　紫苑様の物です」

主は女性だったのだ。

そういえば、まだこの屋敷の主に会っていない。

「主にあいさつしたいのだけど？」

アヤの申し出にアリスが間を置くことなく応ずる。

「主人はすでにお休みなっております」  
わざわざ起こしてもらうのも悪く、アヤは主人との面会をあきらめた。

愁斗もアリスも部屋を去ってしまい、アヤは部屋にひとり残された。

ケータイをポケットから取り出すが相変わらず圏外。部屋には電話機もネット環境もない。

アヤは気分転換のためにも、とりあえずシャワーを浴びることにした。

コックを捻るとシャワーが勢いよく出た。

目を閉じたアヤは噴き出す熱いシャワーを顔面で浴びる。

バストハ八センチの豊かな胸と、肉付きの好い尻の上を水が滑り落ち、アヤは甘い吐息を全身から漏らした。

熱いシャワーを浴びて疲れが取れ、頭もすつきりしてきた。

すると、車に残してきた屍体のことや、この屋敷の住人たちのことが気になりはじめた。

屍体は機会を見計らってどこかに埋めたい。それには住人たちの眼を欺いて、屋敷をこっそり抜け出さなければならぬ。

外は大雨だ。

雨の中で作業はできるだろうか……。

地面は雨で掘り返しやすくなっているだろうが、山奥で、それも暗闇の中で作業するのは危険な気がした。

せめて車が使えればヘッドライトで照らすか、車を少し離れ



た場所に残して車のライトを目印にする。そうでもしなければ暗闇の山中で迷ってしまいそうで不安だった。それほどまでに、外は闇そのものだったのだ。

だからアヤは自分を町に送ってもらうのは昼にして欲しいと提案した。朝が来れば少しは明るくなるだろう。そのチャンスを逃してはならない。

シャワーを止め、アヤはバスルームを出た。

脱衣室には濡れたままの自分の服がある。シャワールームで洗おうかと思ったが、そんな面倒なことする余裕はない。乾いて明日になったらそのまま着てしまおうと考えた。

それまでは用意されたドレスを着るしかない。

軀を拭いて下着を着けないままドレスに袖を通した。

白く質素なロングドレスだ。肌が露出されているのは、カットされた首の辺りだけだった。これならば下着を穿いていなくても問題ないだろう。

「ロングスカートなんて子供のとき以来だわ」

膝に当たる生地をうざったそうに歩き、アヤはまだ濡れている頭にバスタオルを乗せた。

頭を拭きながらアヤはある疑問を引きずっていた。

車のトランクに残してきた屍体よりも、今はこの屋敷のことや、あの二人の子供のことが気になる。

特にあの少女が薄気味悪かった。

今考えても端整すぎて人間味に欠けていたのだ。染みもない、骨格の歪みもなく、左右対称の顔をしていた。人間はどこかバ

ランスが崩れているからこそ、人間に見えるのだ。

髪のを拭いたバスタオルを長椅子に投げると、アヤの足は部屋の外へと向かっていた。

トランクに屍体を積んでいることにより、アヤは疑心暗鬼になっただけで、なにからなにまで不審に思えてならなかった。

使用人やメイドと称して現れたのは子供。

なぜ、この屋敷には子供しかいないのか？

まだ大人に会っていない。

アヤは屋敷の中を散策することにした。

もしかしたら車を盗めるかもしれないという淡い期待もあった。

こんな怪しい場所はさっさとおさらばして、あの屍体をどうにかしなければならぬ。

静かな足取りで息を潜めながら廊下を進んでいると、明かりのついていない暗い廊下があった。

曲がり角から薄暗い廊下を伺う。

Tの字になっているらしい廊下の先を、横に進む明かりが見えた。ランプを持った愁斗と、その後ろにはドレス姿の女性だ。

あの女性がこの屋敷の主だろうか？

確かめたい気持ちもあつたが、なぜか近づいてはいけぬ異気を感じた。真つ暗な廊下を進む二人に不気味さを感じ、見てはいけないものを見てしまった気分になったのだ。

それでも目を離せずにいたアヤは目撃してしまった。

顔がない！

瞬く間であったが、女性の顔がちらりと見えた。が、そこには顔がなかった。のつぺらぼうだったのだ。

アヤは思わず漏らしそうになった声を呑み込み、暗がりでも見えなかったせいでと自分に言い聞かせた。

今の自分は冷静ではない。車に屍体があるせいで、冷静ではないのだ。アヤは頭を冷やしながら廊下を早足で引き返すことにした。

歩くスピードは徐々に速くなり、ついにアヤは走り出していた。

曲がり角の前の廊下を抜けようとしたとき、その角から人影が飛び出して来た。アヤは避けきれず、その影とぶつかってしまった。

アヤは小柄な影を押し倒して、相手の胸に手を突いて上乗りになっていた。手を退けながら相手の顔を確認すると、それはメイドのアリスだった。

「お怪我はございませんか？」

アリスにまん丸の瞳で顔を覗きこまれ、アヤは立ち上がって胸の前で両手を小刻みに振って見せた。

「怪我はないわ」

「それならよろしいのですが……お急ぎのようでしたか、なにかございましたか？」

「いいえ、なにも。少し道に迷ってしまっ……」

「あまり屋敷の中を歩き回らないでくださいませ。他の者は眠り についております」

他の者とは誰のことを示す言葉か？

仕える主人を他とは言わないだろう。愁斗のことだけならば、他という不特定な言い方はしないような気がした。

そこでアヤは疑問を投げかける。

「この屋敷の主人と、あなたと愁斗以外にこの屋敷には人がいるの？」

「ええ。しかし、先ほども申し上げましたが、他の者は眠りについております」

さつき見た愁斗と謎の女性は起きていた。本当に他の者が眠っているのか、勘ぐりたくなる。

けれど、生活音がまったく聴こえてこないことから、本当に寝てしまっているのかもしれない。

アリスは瞬き一つせず、アヤの瞳を射抜くように見つめた。

「お部屋までご案内いたしましたでしょうか？」

「結構よ、もう道がわかったから」

「万が一ということもございますので、お部屋までお送りさせていただきます」

「……わかったわ」

アリスに先導され、無駄な道を通ることなく部屋に帰された。これがアリスの意図だったのかもしれない。

疑惑の眼差しでアリスを観察することにより、アヤはあることに気づいたのだ。

部屋の中に入り、アリスが一礼して部屋を出て行くのを見届け、アヤはほっと肩を撫で下ろした。

そして、アヤはアリスへの疑惑を深めていた。

アリスはまったく瞬きをしていなかった。そう、それが人間味に欠けると思っていた要因だったかもしれない。

それに加え、些細な疑問であるが、アリスを押し倒したときに触れた胸。そこには胸とは違う硬いなにかがあったのだ。ネックレスなどの装飾品にしては、驚掴みにできるほどに大きく、そこに固定されているように手を退かすときも動きはしなかった。

疑惑を持たば切りがない。

テレビもなにもないこの部屋で、仕方なくアヤはベッドに潜ることにした。

一方、アヤを部屋に案内し終えたアリスは、廊下に出たからドアを閉め、少し歩いたところでおもむろに上着を脱ぎはじめた。

そして、ブラウスのボタンをひとつずつ外して、陶器のように白い胸元を露わにしたのだった。幼く小さな胸の間には蒼く輝く宝石が埋め込まれていた。そう、肌に直接、宝石が埋め込まれているのだ。

アリスは謎の宝石を丹念に調べる。

「……大丈夫。けれど、謝りもしないなんて……死ねばいいのに」

不気味に口元を歪めて呟いたアリス。

宝石には傷一つ付いていなかった。アリスはそれを確認した

のだ。

この宝石はいつたい……？

外ではまだ豪雨が降り続けていた。

吹き付ける強風が揺らす窓からは、曇る空の色が見える。

夜はすでに明けていた。

しかし、曇天の空は暗く、空だけでは時刻を知ることはいできない。ただ、夜よりは明るい、それだけだ。

ケータイで時刻を確認したアヤはベッドで上体を起こした。

目の下には隈ができ、よく眠れなかったことを物語っている。

部屋をノックする音が聴こえた。

ゆっくりとドアに近寄り開けると、愁斗の顔がアヤを覗いていた。

「朝食を持ってきました」

トレイに乗せられたトーストや薫り立つコーヒー。

「飲み物はコーヒーでよろしかったですか？」

「ええ、好きだから……」

アヤはトレイを受け取ると、愁斗は自然な動きで部屋に足を踏み入れて来た。

「ところで、昨晩は屋敷を歩き回っていたそうですが、なにをされていたのですか？」

勘ぐるアヤは疑問を抱く。なぜ、わざわざこんなことを聞いてくるのだろうか？

「興味本位で、ただ意味もなく歩き回っていただけよ」

答えるアヤの瞳を愁斗がなにかを詮索するような目つきで注視している。

だが、愁斗はそれ以上のことはなにも口にしなかった。用事の済んだ愁斗は部屋を出て行こうとする。

「では……」

「ちよつと待って、そう、あの頼んで置いたこと。あたしを送ってくれるのを昼にして欲しいって件」

「主人に話しましたところ、その件については問題ないと……ただ、昨晩から続く大雨のために道がぬかるみ、車を出せるか疑問とのことです」

アヤに予感がした。

まさかとは思うが、自分を外に出さない気だと思ったのだ。

「もう今日は仕事を休むことにしたけど、今日中に帰れないのは困るわ」

「ですが、車が走れない以上、帰るのは難しいと思います」

「電話を貸してくれないかしら、ケータイが圏外で使えないのよ」

「電話はありません」

その言葉にアヤの焦りは色濃くなった。

会社は無断欠勤になってしまった。のちに“行方不明事件”で警察に事情聴取をされたら不利だ。計画では昨日うちに屍体を捨てて、今日はなに食わぬ顔で会社に出社する予定だったのだ。

欠勤の理由を会社に言い訳する機会も与えられないばかりか、

電話がなければこの屋敷でなにかあっても助けを求められない。この屋敷に住む人々への不信感は募るばかりだ。

一刻も早くアヤは屋敷を離れたかった。だが、未だに大雨の降る山に、ひとりで出る気にもなれない。

まだ、屍体も車に残してきたままだ。

なにかから片付けていけばよいのか、アヤはパニック寸前だった。

「そうだ、まだ主人に挨拶してなかったわ。この屋敷の主人に会わせて欲しいのだけど？」

「昨晩は、主人はお休みになっていきますと言いましたが、実は主人は人と会うのが嫌いなのです」

もうアヤの耳にはすべて言い訳にしか聴こえなかった。疑心暗鬼も酷くなっている。

「主人に会わせなさい！ 直接話して、車を出してもらえように頼むわ！」

怒鳴るアヤに愁斗は沈黙した。恐縮しているのではない、なにかを考えているのだ。

しばらくして、愁斗は口を開けた。

「実は主人は口が利けないのです。ですから、人と会うことを拒んでいます」

だからこんな人里を離れた山奥に屋敷を構えて暮らしているのか？

しかし、アヤの耳に入ることは全て嘘になる。

「信じられないわ。どうしてあたしに会わせたくないわけ？」



「ですから、主人は口を利けないからです」

「そんなの嘘、あたしに会わせたくない理由があるのでしょ  
う？」

「……わかりました。主人を説得してきます。ただ、主人を見  
ても驚かないようにお願いします」

驚くとは　なにを？

昨晚アヤが見た謎の女性。アヤが見た限りでは“顔”がな  
った。もしかしたら、本当に顔がないのかもしれない。

「しばらくお待ちを……」

愁斗は踵を返して部屋を出て行った。

その時間をアヤはとても長く感じた。部屋を歩き回り、愁斗  
が帰ってくるのを待つ。ただ、長く錯覚しているだけか、それ  
とも愁斗が主人を説得するのに時間を要しているのだろうか。

ドアをノックする音が聴こえ、愁斗が部屋に入ってきた。

「お待たせしました　主人の紫苑様です」

愁斗の後ろから部屋に入ってきたドレス姿の女性の“顔”を  
見て、アヤは息を呑んで絶句した。

やはり顔がなかった。

しかし、本当に顔がなかったわけではなく、顔は白い仮面に  
よって隠されていたのだ。

白い仮面の女性　紫苑はアヤに会釈をした。

やはり言葉はない。

なんと言っているのかアヤは困り果てた。会わせるといった  
ものの、相手を目の前にしたら、なにをいっているのかわから

なくなつた。

絶句したままのアヤを置いて、愁斗が話しはじめた。

「口を利けないというのは嘘で、心を許した者にしか口を利きません。全ては顔に負つた大火傷のせいです」

仮面の下を見せるとまでは言えない。

紫苑に会つたことによつて、この屋敷の不気味さが増しただけだつた。

「もうよろしいでしょうか？」

と、愁斗は催告するように言った。

「紫苑様はお部屋に戻りたいそうです」

紫苑はひと言も発していないが、愁斗が代弁した。

アヤはなにも言えずに頷いた。とても話し合えるような雰囲気ではなかつたし、目の前から「仮面」に早く消えて欲しいというのもあつた。

しかし、アヤはあることに気づいた。

「なにか腰の後ろに隠しているの？」

愁斗は片手を腰の後ろに回していた。腰痛を患うような年齢でもないだろうし、今までそんな仕草をしていなかった。それに、なにかを持って動かしているような、微かな腕の動きを見せているのだ。

「いえ、なにも隠していませんが？」

愁斗は隠れていた手を胸の前に出した。なにも持っていないかつた。

アヤの予想は外れた。ナイフかなにかを持っているような、

悲観的なことを疑念を抱いてしまっていたのだ。

「それでは、御用がないのなら、私たちはこれで失礼します」  
愁斗は不気味な主人を連れて部屋を出て行った。

屋敷を早く出たいという気持ちが強くなり、アヤは自分でも気づかないうちに爪を噛んでいた。

苛々しながら歩き回り、アヤは窓辺で足を止めた。

曇天は晴れる様子はないが、雨は小降りになっている。

そうだ、屍体をどうにかするには今しかチャンスがない。

アヤは急いで屋敷を出て、車を置いてきた場所に向かうことにした。

玄関を出ようとしていたとき、真後ろから誰に声をかけられた。

息を呑みながら振り向くと、そこにはアリスが立っていた。

「どこかにお出かけでございますか？」

「あの、車に大事なものを置きっぱなしにしている、それを取りに行こうと……」

「それでは、その傘立てにございます傘をお使いください」

「あ、ありがとうございます」

動揺している自分を抑えながら、アヤは傘を借りて玄関を飛び出した。

傘を差してしばらく歩き、恐怖に駆られて後ろを振り向く。

自分を怪しんでアリスがつけてきているかもしれないと思っただが、それは単なる思い過ごしで済みそうだった。気配もなにもしない。

ぬかるんだ道に気をつけて歩き、車が見えてきたところで、アヤは叫びそうな声を呑み込んで車に駆け寄った。

車のトランクが開いている。

そんな馬鹿なことがあるはずがない！

まさか屍体が自分で外に出たともいいうのか？

実はまだ生きていたともいいうのか？

「……そんなはずない。あいつはあたしが殺したのよ」

怨念を込めて呟いた。

考えられる可能性を模索して、アヤは瞬時に結論を出した。

あの屋敷の奴らが屍体を運んだのだ。それしか考えられない。

慌ててアヤは屋敷に引き返した。

玄関ホールにアリスの姿はすでになかった。

それどころか、屋敷の中は人の気配がしない。

今まで会った三人以外にも人が住んでいるのではないのか？

それとも、屋敷が広いためなのか？

これだけ静かだと、まるで廃墟のように不気味だ。

息遣いを荒くしながらアヤはこの屋敷の主　紫苑を探すことにした。

この屋敷全員がグルになっているか、それとも個人で屍体を運び出した奴がいるのか、それはまだわからないが、主人である紫苑を問い詰めるのがよいだろうとアヤは考えた。

主人の部屋はどこか？

目ぼしい部屋を探してアヤは廊下を進んだ。

いた！

廊下の先で愁斗と紫苑が歩いている。

すぐにその後を追ってアヤは廊下を左に曲がった。

曲がった先の廊下には誰もいなかった。

辺りを見回すと、近くのある部屋のドアは左右に二つ。どちらかに入った可能性は高い。

アヤは若干、自分との距離が近かった左のドアを開けた。

部屋に入った拍子にインクの臭いが鼻を衝く。

壁際に並べられた本棚と、座り心地の良さそうなロッキングチェア。どうやらここは書斎らしい。

部屋の中心に立つてぐるりと周囲を見回していると、アヤの耳が微かな音が捉えた。それはモーターが駆動しているような音だった。

小さな音でどこから聴こえているかわからない。

部屋をゆっくりと歩き回り、音のする方向を探した。微かな音過ぎて、近づいているのか遠くなっているのか、はつきりしないまま、音はいつの間にか聴こえなくなっていた。

音の発生源は別の部屋だったのかもしれないと思い、アヤは向かいの部屋に駆け込んだ。

前の部屋よりも濃いインクの臭い。

本棚は壁際だけでなく、部屋中に並べられていた。書斎ではなく書庫が適切だろう。この屋敷の主は随分と読書家らしい。

書庫に入ったときからアヤは今まで感じなかった気配を感じていた。

人が近くににいるのか、それともこの部屋になにかあるのか？  
アヤは本棚を観察した。

分厚い皮の表紙の本。中を開いてみると、何語で書かれているのかすらわからない文字が羅列していた。頭が痛くなりそう  
だ。

隣の本も取って中身を調べると、幹が枝分かれした樹木に数字や文字らしきものが描かれていた。これはカバラと呼ばれる秘術の秘奥を表したもので、セフィロトの樹と呼ばれるものであるが、そんなことをアヤが知る由もない。

この書庫にある本のほとんどが魔導書の類であったのだ。  
書庫を少し歩き回ったが、ここには誰もいないらしい。

アヤは部屋を出ようとドアノブに手を掛けた瞬間、ドアの手に前に床の上を横に引きずったような跡を見つけた。

横に入った跡はドアの手前を通り過ぎ、少し視線を延ばしたところにある本棚の側面に繋がっていた。床を引きずった跡は本棚の下まで続いていたのだ。

その本棚に目を付けたアヤは力いっぱい本棚を横にずらそうとした。だが、いくら力を入れてもびくともしない。ただ重いだけなら揺れるくらいしてもいいものだが、全く微動だにしないのだ。本棚は固定されているように思えた。

動いた痕跡があるということは、どうにかすれば動くはずだ。  
アヤは昔に見た二時間ドラマを思い出した。書斎の本棚に閉まってあった本のひとつが、本棚を動かす駆動スイッチになっ  
ているというもの。

それを思い出したアヤは本棚の本を全て掻き出そうとした。次から次へと乱暴に本を床に落とし、一番隅にあった本を出そうとして手が止まった。今までと違う感触がしたのだ。

一呼吸を置いて、その本をゆっくりと手前に傾けると、どこかでモーターか歯車が駆動するような音が聴こえた。

眼を見開いたアヤの前で、本棚が左に動いていく。

そして、本棚の裏から隠し階段が現れたのだ。

迷わずアヤは薄暗い階段を下りた。

螺旋状の階段を下りていくと、その向こうから光が見えた。

テーブルの上に火の点いたランプが置かれている。つまり、近くに人がいるということだ。

しかし、人の気配はどこにもない。

テーブルの上には、用途のわからない物が置かれていた。

理解できる範囲の物はフラスコやピーカーなどの実験器具。

なにかの研究をしていたとも考えられるが、アヤは台に置かれているモノを見て不快感を顔で表した。

台の上には息をしないようすの小動物が置かれていた。

解剖実験でもしそうな感じだが、その類のメスなどの器具はなく、代わりに小動物の下には円形の紋様が描かれていた。不気味さを感じずにはいられない雰囲気だ。

他にも部屋の中にはいくつかの箱があった。

それが柩だと気づいたアヤの背筋を冷たい風が撫でた。

柩の数は三つ。

この中に車のトランクから消えた屍体が？

そう考えた途端、アヤは自分が柩に入っている映像が臉の裏に浮かび、軀を震わせてゾツとしてしまった。自分もこの中に入れられる運命かもしれないと考えてしまったのだ。

アヤは震える手を抑えながら柩の蓋に手を掛け、ゆっくりと蓋を横にずらした。

「イヤッ……」

思わずアヤは小さく叫びを漏らしてしまった。中で全裸の女性が目撃していたのだ。だが、よくよく見ると、それがヒトではないとわかった。

肌の質感は人間そのものの、姿かたちも本物から型を取ったように精巧にできている。よくできてはいるが、関節の繋ぎ目に線がある。作り物の人形だ。

等身大の人形を柩になんて……と、アヤは思い、ハツとして脳裏にアリスを浮かべた。だが、思いついた疑惑も、そんな馬鹿なと思ひ直した。

残る二つの柩を開けてみたが、やはり中には人形が入っていた。

他の物を探そうとアヤは辺りを見回した。

点いたままのランプがあるのに、人の姿が見当たらない。

もしかしたら、まだ隠し扉のような物があるのかもしれない。アヤは部屋の奥にある大きな鏡に惹かれた。

高さは二メートル以上、横幅はアヤが両手を広げたくらいある。

何気ない気持ちでアヤが鏡に触れた瞬間、その手が鏡の中に



吸い込まれ、倒れるようにして鏡の中へ入ってしまったのだ。  
た。

倒れたアヤは自分が乾いた大地に横たわっていることに気づいた。

ここはどこだと思考を巡らすよりも早く、恐ろしい呻き声がアヤの鼓膜を振るわせた。それもひとつではない。多くの餓えた獣のような呻き声が、そこから中から聴こえてきたのだ。

すぐに立ち上がるうとしたアヤの前に、赤黒く大きな影のしかかっていた。

鋭い牙を剥いた怪物がアヤに噛み付こうとしていたのだ。

「きゃあああああつ！」

甲高い叫びがあがり、首が落ちた。

アヤの首ではない。

鬼のような顔をした怪物の首が、不可視のなにかで斬られ、地面にずり落ちたのだ。

真っ赤な血が吹き上がる頭のない身体を、放心しながらアヤは見つめた。

いったいなにが起きているのか理解できない。

闇色の風が叫び声をあげながら吹き荒れ、怪物たちを喰らっていく。

その中に見覚えのある二人がいた。

世話しなく両手を動かす愁斗と、手から輝線を放つ仮面の女  
紫苑。

二人が群がる怪物たちと戦っているのは一目瞭然だった。

愁斗が立ちすくむアヤに顔を向けて叫ぶ。

「地面に伏せて動くな！」

愁斗の手が素早く動き、煌く線が宙に幾何学模様を描いた。

「傀儡士の召喚を観るがいい、そして恐怖しろ！」

魔法陣の“向こう側”で、それが呻き声をあげた。

あまりに恐ろしい呻き声にアヤは耳を塞いだ。その呻き声は脳に直接響き渡っているように躰の中を侵食した。

それの呻き声によつて、地震が起きたように地面が激しく揺れ、石巨人がこの世に創り出された。

地面の岩肌が盛り上がつて形作つた石巨人の数は五体。

全長五メートルを超える石巨人の拳が風を唸らせながら横殴りに振られた。

拳に当たつた怪物たちはドミノ倒し式に倒せれ、気がつくと

石巨人たちはアヤたちを守るように囲んでいた。

「今のうちに逃げるぞ！」

愁斗が叫びながらアヤの腕を掴んで立たせた。

引きずられるままにアヤは巨大な扉を抜けて、まるで夢が覚めたように現実に戻された。

気がつくと、そこはあの隠し部屋だったのだ。

アヤの後ろには鏡がある。

この鏡が、ゲートであり、あの地獄のような場所に繋がっていたのだ。

そして、アヤは愁斗と紫苑が人間ではないことを思い知らさ

れた。

あんな場所で怪物たちと戦う二人を人間と言えるか？

蒼い顔をしたアヤが紫苑に詰め寄った。

「いつたい……あなたたち何者なの!？」

「紫苑に尋ねても無駄だ」

鋼のような口調で愁斗は言った。

「紫苑には心がない。紫苑は人形なんだ」

愁斗の口調は使用人としてアヤに接していたときとは違う。

今の愁斗には感情の揺れが感じられた。

紫苑の腕がゆつくりと上がり、その手が仮面に掛かった。

眼を離せずにいたアヤの目の前で、紫苑は仮面を外したのだ。

そこには顔がなかった。眼も鼻も口もない。のっぺらぼうの顔だったのだ。

「まさか……この人も……」

言葉に詰まるアヤに愁斗が続ける。

「傀儡……人形だ。僕が操ってる」

「操るって……そんな……じゃあアリスも？」

「それは違いますわ」

玲瓏な声が響き渡り、アリスが階段を下りて姿を現した。

「わたくしは ジュエル を持っておりませゆえ、自らの意思で考え、動くことができますのでございます」

おもむろにアリスは上着を脱ぎ、ボタンを外してブラウスの前を全開にした。

露わになる小さな胸の真ん中には、蒼く輝く拳ほどの宝石が

あった。

「ここにある ジュエル は、わたくしの魂が結晶化したものなのでございます」

アリスの言っていることはかるうじて理解できた。しかし、アヤの頭は混乱し、なにが真実で、なにが嘘なのか判断できない。

アリスの胸に謎の宝石がある。その ジュエル が魂の結晶という話はわかったが、それを事実だとは受け止められない。

愁斗はあの部屋の奥にある鏡を指さした。

「あの先にある世界を見たろう？」

アヤが無言で頷き、愁斗は話を続ける。

「僕はあの場所を 地獄 と呼んでいる。君が信じるかどうかはわからないが、あの 地獄 の最果てには僕の母の魂が捕らえられている。だから、母の魂を解放したいのだけれど、怪物たちが邪魔でなかなか先に進むことができないんだ」

「なぜ、そんなことを……？」

疑問を投げかけるアヤに愁斗は憂う瞳で紫苑を見つめた。

「この傀儡は母の魂を入れる器なんだ。母の魂を加工した ジュエル を埋め込めば、母は黄泉返る……そこにいるアリスのように傀儡に魂が宿るんだ」

とても信じられない内容だった。

しかし、愁斗が得体の知れない力を秘めた存在であることは、あの 地獄 での戦いを思い起こせば嫌でも理解できる。あの力を持つてすれば、今の話を実現することも可能かもしれない。

あの場所で聴いたこの世のものとは思えない呻き声が、まだアヤの耳から離れない。

まだ蒼白い顔をしているアヤに愁斗が詰め寄った。

「僕は全て話した。ところで、君はなぜこんな山奥に？」

それが好奇心による疑問ではなく、なにかを掴んでいる質問だとアヤはすぐに気づいた。

もう隠す必要もないような気がした。

精神的に疲れ果て、追い詰められ、すべてを吐き出したい気分だった。

「殺したのよ……付き合ってた男を殺したの……他に女なんてつくるから、殺してやったのよ！」

叫んだアヤの目からは涙がとめどなく零れ落ちていた。

恋人殺害を吐露したアヤは泣き崩れて地面に座り込み、髪の毛を掻き毟って床に頭を埋めた。

アヤは沈黙しながら背中を丸めて震え、やがて静かな部屋にケタケタと嗤い声が響いた。

大きく肩を震わせるアヤは笑いながら顔を上げた。その目は赤く膨れ上がり、口は醜悪に歪んでいる。

「きゃははっ……きゃははは……屍体は……あんたたち屍体をどこに隠したのよ！」

野獣のごとく咆えたアヤは狂気の眼で愁斗たちを睨みつけた。今にも襲い掛かってきそうなアヤに動じず、愁斗はアヤの後ろを指差して嗤う。

「……屍体ならあなたのすぐ後ろに」

アヤが振り向くと、そこには自分が殺したはずの男が！

蒼白い顔をして眼は濁り、頭から出た血は黒くなって髪とからまって固まっている。目の前の男からは生気が感じられなかった。

やはり、男は死んでいた。

屍体は大きく口を開け、アヤの頸動脈に噛み付く。

「ぎゃああああつ！」

眼を剥いて限界まで開いた口から黒い血の塊が吐き出され、アヤは噛み千切られた首を手で押さえながら、力なく背中から転倒したのだった。

床で身体を痙攣させながら、アヤは出血性ショックで死んだ。復讐を果たした男の屍体は、また動かぬ屍体に戻っていた。

二つの屍体を考え深げに見下ろす愁斗。そして、愁斗の手が煌きを放ち、その輝線は空間に傷をつくった。

その傷は唸り、空気を吸い込みながら広がり、空間に裂け目をつくる。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。耳を塞がずにはいられない。

「闇よ、喰らえ！」

裂けた空間から闇が叫びながら飛び出した。

闇は二つの屍体の腕を掴み、足を掴み、胸を掴み、軀に絡み付き、呑み込んだ。

床に血を一滴も残さず、闇は泣き叫びながら裂け目に還

っていく。

「これで終わりだ」

愁斗が呟くと、闇の還った裂け目は完全に閉じられた。

目を瞑る愁斗の傍らで、アリスが尋ねる。

「屍体が蘇って復讐をしたのか、それとも愁斗様が操ったので

「ごさいますか？」

「さあ？」

惚ける愁斗は艶やかに嗤った。

そして、全ては闇の中へ。

傀儡館（完）